

狭山市文化財報告 第23集

狭山市埋蔵文化財調査報告書 13

城ノ越遺跡 第7・8次調査

個人住宅・ほ場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

2001

埼玉県狭山市教育委員会



狭山市埋蔵文化財調査報告書 13

しろ の こし い せき  
城 ノ 越 遺 跡 第7・8次調査

個人住宅・道路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

2001

埼玉県狭山市教育委員会



## 序

狭山市を貫流する入間川流域には、先人の生活、文化を伝える埋蔵文化財が連なるように分布しています。こうした営みの跡は、古くは1万6千年前の先土器時代から近世まで、途中断続しながらも、郷土の歴史を語り継いでいます。しかし、これらの貴重な埋蔵文化財も、当市が都心から40km圏内に位置するという好条件から急激に開発が増加し、常に破壊の危機にさらされてきました。

当市では、開発によって消え去る埋蔵文化財を記録保存するため、国庫補助事業や市単独事業として市内遺跡の発掘調査を実施してまいりました。本書で報告する城ノ越遺跡は、市北部の柏原地区に所在する遺跡で、昭和52年以降、連綿と調査が行われている市外でも著名な奈良・平安時代を中心とする集落遺跡です。今回報告の対象としたのは、平成2年度と平成3年度に実施した調査で、個人住宅及びほ場整備に伴って行われたものです。個々の調査面積はわずかでありますが、縄文時代の陥穴や奈良・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡等が発見され、貴重な遺物が出土しています。これらの成果が、本遺跡の研究と埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、市民の皆様の生涯学習に資する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査においてご理解を頂いた地権者、また献身的に調査に従事し、報告書刊行までご協力いただいた協力員の方々に厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

狭山市教育委員会  
教育長 野村甚三郎

## 例　　言

- 1 本書は、狭山市柏原地内所在の城ノ越遺跡第7・8次調査の報告書である。
- 2 本書で報告する発掘調査は個人住宅建設及びほ場整備に伴うもので、前者は国庫補助事業、後者は市単独事業として実施した。
- 3 発掘調査届に対する文化庁の受理番号と調査原因は、以下のとおりである。  
　　城ノ越遺跡 第7次調査 平成3年4月3日付、2委保記第5-6434号 個人住宅建設  
　　城ノ越遺跡 第8次調査 平成3年10月11日付、3委保記第5-3169号 ほ場整備
- 4 発掘調査期間は、以下のとおりである。  
　　城ノ越遺跡 第7次調査 平成2年11月5日～平成2年11月14日  
　　城ノ越遺跡 第8次調査 平成3年5月21日～平成3年10月15日
- 5 報告書作成は、平成12年11月1日から平成13年3月31日まで行った。
- 6 発掘調査は第7次調査は小渕良樹、第8次調査は石塚和則が担当し、飯田優子、飯島稔恵、遠藤明子、大場啓子、金山哲也、国重和子、 笹島弘子、坂入しげ子、坂入誠、桜井ハル、指田ツネ、田口文枝、中岡幸子、那須テルヨ、宮野次郎、諸井芳子、山本とし子が参加した。
- 7 図版の作成と出土品の整理は石塚が担当し、今井綾子、小林はつみ、斎藤通子、瀬戸山真由美、坂東昭子、山川淑恵の補助を受けた。
- 8 土師器・須恵器の実測及びトレースは、石塚香氏の協力を得た。
- 9 本書の執筆は石塚があたった。
- 10 本書の編集は狭市教育委員会社会教育課が行い、石塚が担当した。
- 11 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸氏並びに諸機関から御教示・御協力を賜った。厚く感謝の意を表する（敬称略）。  
　　石塚 香、富田和夫、中平 薫、田中広明、根本 靖、松本尚也、埼玉県教育委員会 文化財保護課、財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団、所沢市埋蔵文化財調査センター、日高市教育委員会

## 凡　　例

- 1 遺構図の縮尺は住居跡1/60、同竈跡1/30、掘立柱建物跡1/60、土壙1/40、全測図1/200、1/400とし、各挿図にスケールを付した。
- 2 遺構平面図の方位は座標北を、遺構断面図の水糸レベルは、海拔高を示す。
- 3 遺構番号は、遺跡内の過去の調査で検出された遺構を含めた通し番号である。
- 4 遺物実測図の縮尺は、土器、石器いずれも1/3とし、各挿図にスケールを付した。
- 5 本報告書に掲載した出土品は狭市教育委員会で保管している。

# 目次

序	1
例言・凡例	2
目 次	3
挿図・図版目次	4
I 発掘調査の概要	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査の組織	2
II 遺跡の立地と環境	3
1 遺跡の概要	3
2 歴史的環境	3
III 城ノ越遺跡 第7次調査	7
1 調査の経過と成果	7
2 検出遺構	7
3 出土遺物	10
IV 城ノ越遺跡 第8次調査	13
1 調査の経過と成果	13
2 検出遺構	13
3 出土遺物	25
V まとめ	30

## 挿図目次

第1図 狹山市遺跡分布図	4	第10図 第15号住居跡	18
第2図 城ノ越遺跡第7次調査区位置図及び全測図	8	第11図 第6号掘立柱建物跡	19
第3図 第13号住居跡(1)	9	第12図 第7号掘立柱建物跡	20
第4図 第13号住居跡(2)	10	第13図 第8号掘立柱建物跡	21
第5図 第13号住居跡出土遺物(1)	11	第14図 土壙(1)	23
第6図 第13号住居跡出土遺物(2)	12	第15図 土壙(2)	24
第7図 城ノ越遺跡第8次調査区位置図	14	第16図 第14号住居跡出土遺物	26
第8図 城ノ越遺跡第8次調査区全測図	15	第17図 第15号住居跡出土遺物(1)	28
第9図 第14号住居跡	16	第18図 第15号住居跡出土遺物(2)	29

## 図版目次

図版 1 城ノ越遺跡第7次調査風景 第13号住居跡調査風景	図版 5 A区掘立柱建物跡群全景 第15号住居跡全景
図版 2 第13号住居跡全景 第13号住居跡竪全景	図版 6 第50号土壙全景 第6号掘立柱建物跡全景
図版 3 城ノ越遺跡第8次調査B区全景 第14号住居跡全景	図版 7 第7号掘立柱建物跡全景 第8号掘立柱建物跡全景
図版 4 第14号住居跡竪内遺物出土状況 第48号土壙全景	図版 8 第13・14号住居跡出土遺物 図版 9 第15号住居跡出土遺物

## I 発掘調査の概要

### 1 発掘調査に至る経過

狹山市教育委員会では、昭和58年度以降、国及び県の補助金を得て、民間開発及び個人住宅建設に係る埋蔵文化財確認調査、さらに後者については記録保存を目的とした発掘調査を実施している。これらの調査は通常、農業委員会事務局や開発行為に関わる部局との連絡、地権者との調整により隨時行っている。なお、公共事業についても同様の調整の上、調査を実施している。

今回報告の城ノ越遺跡第7・8次調査は、それぞれ個人住宅建設と工場整備事業に伴うもので、前者は事前に確認調査の依頼を受けて試掘を行い、遺構の有無を確認している。後者については、過去に実施した隣接地の調査結果により、遺構存在がほぼ確実なため開発者との協議の上、直接本調査に入った。いずれも、発掘調査が工事日程に支障をきたさないよう調整し、平成2年度及び平成3年度に国庫補助事業と市単独事業として行った。

各調査の文化財保護法第98条の2の規定による埋蔵文化財発掘調査届に係る文化庁長官の受理通知は例言に示したとおりである。

各調査区の所在地、開発者、調査面積は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	開 発 者	調査面積	時 代
城ノ越遺跡第7次調査 (県遺跡番号22-013)	狹山市柏原2,309-6外	早川 広	258m <sup>2</sup>	縄文時代 奈良時代
城ノ越遺跡第8次調査 (県遺跡番号22-013)	狹山市柏原2,318外	狹山市	840m <sup>2</sup>	平安時代

## 2 発掘調査の組織

### 1) 発掘調査（平成2年度）

主 体 者	狹山市教育委員会	教 育 長	武居 富雄
		次 長	山崎 稔
担当 課	社会教育課	課 長	大澤 晋平
	文化財係	係 長	伊藤 清
調査担当者		主 事	小渕 良樹
			小渕 良樹

### 2) 発掘調査（平成3年度）

主 体 者	狹山市教育委員会	教 育 長	武居 富雄
		次 長	山崎 稔
担当 課	社会教育課	課 長	大澤 晋平
	文化財係	係 長	伊藤 清
		主 事	小渕 良樹
		主 事 補	石塚 和則
		主 事 補	松嶋 直人
調査担当者			石塚 和則

### 3) 整理・報告（平成12年度）

主 体 者	狹山市教育委員会	教 育 長	野村甚三郎
		次 長	横田 武雄
担当 課	社会教育課	課 長	梅田 久詞
		主 査	小渕 良樹
		主 任	原 肇
		主 任	石塚 和則
整理担当者			石塚 和則

## II 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の概要

城ノ越遺跡は、狭山市柏原字城ノ越外に所在する縄文時代前・中期及び奈良・平安時代の集落遺跡で、西武新宿線狭山市駅より直線距離にして北3km付近に位置する。遺跡ほぼ中央、南西から北東にかけて県道狭山鯨井線が走る。県道の東側は農業振興区域で、野菜畑や麦畑の田園風景が広がり、西側は市街化調整区域だが、徐々に開発が進み家屋が点在している。分布調査から推定される遺跡範囲は800×350mで、遺跡内の標高は北側が49m、南側が50mで、遺跡面はほぼ平坦といえる。遺跡東側は段丘崖で下位面との比高差は約12mを測る。

周辺遺跡としては、北側と南側には本遺跡とほぼ同時期の宮ノ越遺跡、御所の内遺跡、西側には縄文時代前～後期の集落遺跡と考えられる宮原遺跡が立地する。中でも宮ノ越遺跡は昭和53・54年の埼玉県遺跡調査会による調査以降、現在までに7回に渡る調査が実施され、奈良・平安時代の堅穴住居跡67軒、掘立柱建物跡19棟、墓跡4基が検出されており、本遺跡の内容、性格を考える上で有益な情報を提供している。また、本遺跡の対岸には90軒を越える奈良・平安時代の堅穴住居跡を検出した揚櫛木遺跡が立地している。

### 2 歴史的環境

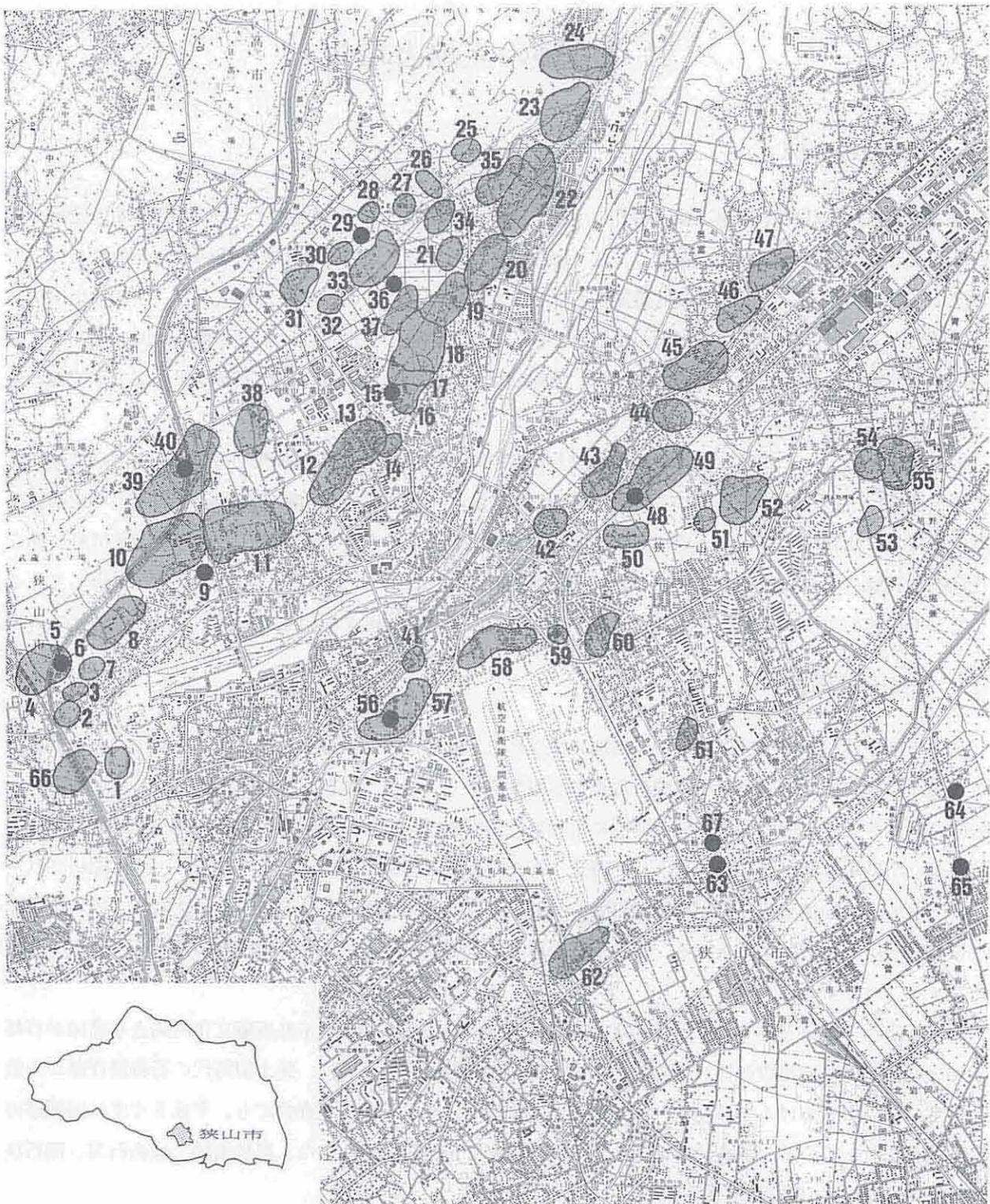
狭山市内を流れる河川には、外秩父山地の伊豆ヶ岳、武川岳等に水源を発し、市域を北東方向に貫流する入間川、狭山市立入間川東小学校付近等に水源を有する久保川、現在五号幹線水路となっている智光山公園に水源をもつ小河川、さらに入間川に平行して市域南側を流れる不老川がある。昭和56・57年度に実施された市内遺跡詳細分布調査によって確認された67ヵ所の遺跡は、いずれもこれらの河川に開折された段丘・台地上に立地している（増田他 1983・1984）。特に入間川流域には、左岸3段、右岸2段の段丘面上には39ヶ所もの遺跡が分布する。ここでは、近年の調査成果も加えて、各時代の特徴的な遺跡について言及することとする。

先土器時代の遺跡としては、平成2年度から平成3年度にかけて（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した西久保遺跡発掘調査において、先土器時代の石器製作跡が多数発見され、当市における当該期の一端が明らかとなった。狭山市遺跡調査会でも、平成6年度に同遺跡の発掘調査を行っている。武蔵野台地第4層下部の良好な資料を得た。また、宮地遺跡では細石刃、細石核が表採されている（城近他 1972）。

縄文時代の遺跡は、今回報告の入間川両岸に多数存在している。時期としては前期後半から中期末にかけてが主体を占めており、この時期偏差が本市における縄文時代を特徴づけている。ただし、前・中期以外の資料も近年の発掘調査によって、徐々に蓄積されつつある。

草創期については、上広瀬上ノ原遺跡、滝祇園遺跡で両面加工尖頭器、西久保遺跡、下双木遺跡、丸山遺跡で有舌尖頭器が出土しているが、現在のところ検討材料が極めて少ない。

早期では、平成5年度に実施した柏原所在の高根遺跡発掘調査において、押型文土器の小破片が出土している。また、同年度に実施した今宿遺跡発掘調査で早期後半の野島・茅山式期のファイヤーピットが検



第1図 狹山市遺跡分布図

狹山市内遺跡一覧（括弧内は、県遺跡番号）

- |                              |                              |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 東八木窯跡群 (22049) 奈・平         | 35 宮原遺跡 (22017) 繩(前～後)       |
| 2 八木遺跡 (22068) 繩(中)、奈・平      | 36 下双木遺跡 (22078) 繩(草)        |
| 3 八木北遺跡 (22021) 奈・平          | 37 上双木遺跡 (22077) 繩(中・後)、奈・平  |
| 4 八木上遺跡 (22022) 繩(前・中)、奈・平   | 38 上広瀬西久保遺跡 (22073) 奈・平      |
| 5 沢口上古墳群 (22020) 古(後)        | 39 西久保遺跡 (22069) 先、奈・平       |
| 6 笹井古墳群 (22019) 古(後)         | 40 東久保遺跡 (22070) 先           |
| 7 沢口遺跡 (22080) 繩(早～中)、古～平    | 41 上諏訪遺跡 (22086) 繩(中・後)、奈・平  |
| 8 宮地遺跡 (22018) 繩(中)、奈・平      | 42 滝祇園遺跡 (22066) 繩(前・後)、古～平  |
| 9 金井遺跡 (22071) 中             | 43 峰遺跡 (22024) 繩(中・後)、奈・平    |
| 10 金井上遺跡 (22023) 繩(前)、奈・平・中  | 44 戸張遺跡 (22026) 繩(前・中)、奈・平   |
| 11 上広瀬上ノ原遺跡 (22005) 繩(草)、奈・平 | 45 揚櫛木遺跡 (22027) 繩(前・中)、奈・平  |
| 12 霞ヶ丘遺跡 (22004) 繩(中)、奈・平    | 46 坂上遺跡 (22029) 繩(中)、奈・平     |
| 13 今宿遺跡 (22002) 繩(早～中)、奈・平   | 47 稲荷上遺跡 (22032) 繩(前・中)、奈・平  |
| 14 上広瀬古墳群 (22001) 古(後)       | 48 上中原遺跡 (22025) 先           |
| 15 森ノ上西遺跡 (22079) 先          | 49 中原遺跡 (22025) 繩(早～後)、奈・平   |
| 16 森ノ上遺跡 (22008) 繩(中)、奈・平    | 50 沢台遺跡 (22079) 繩(中)、奈・平     |
| 17 富士塚遺跡 (22009) 繩(中)、奈・平    | 51 沢久保遺跡 (22041) 繩(中)        |
| 18 鳥ノ上遺跡 (22010) 奈・平         | 52 下向沢遺跡 (22042) 繩(中・後)、奈・平  |
| 19 小山ノ上遺跡 (22011) 繩(中・後)、古～平 | 53 吉原遺跡 (22067) 繩(前)         |
| 20 御所の内遺跡 (22012) 奈・平        | 54 下向遺跡 (22085) 繩(前～後)       |
| 21 英遺跡 (22074) 中             | 55 台遺跡 (22084) 繩(前～後)        |
| 22 城ノ越遺跡 (22013) 繩(前・中)、奈・平  | 56 稲荷山公園古墳群 (22052) 古(後)     |
| 23 宮ノ越遺跡 (22016) 繩(前・中)、奈・平  | 57 稲荷山公園遺跡 (22051) 繩(中)      |
| 24 字尻遺跡 (22075) 繩(前～後)、奈・平   | 58 石無坂遺跡 (22083) 繩(中)、奈・平    |
| 25 丸山遺跡 (22037) 繩(前・中)、奈・平   | 59 富士見西遺跡 (22082) 繩(中)、奈・平   |
| 26 金井林遺跡 (22035) 繩(中・後)      | 60 富士見北遺跡 (22072) 繩(前・中)、奈・平 |
| 27 鶴田遺跡 (22044) 繩(前・中)       | 61 富士見南遺跡 (22081) 繩(中)       |
| 28 上の原東遺跡 (22065) 奈・平        | 62 町屋道遺跡 (22088) 繩(前～後)、奈・平  |
| 29 上の原西遺跡 (22063) 繩(中)       | 63 七曲井 (22046) 中             |
| 30 半貫山遺跡 (22061) 中           | 64 堀兼之井 (22047) 中            |
| 31 稲荷山遺跡 (22058) 繩(後)        | 65 八軒家の井 (22076) 中           |
| 32 前山遺跡 (22059) 繩(中)         | 66 八木前遺跡 (22087) 繩(前・後)      |
| 33 高根遺跡 (22062) 繩(中・後)       | 67 堀難井遺跡 (22089) 中           |
| 34 町久保遺跡 (22034) 繩(中)、奈・平    |                              |

出されており、数個体の土器が復元可能と思われる。

前期では、黒浜式期の集落跡が上奥富所在の揚櫛木遺跡や笹井所在の八木上遺跡で検出されており、この時期になってようやく狭山市内の縄文集落の様相が明確となってくる。また、平成7年度調査の稻荷上遺跡でも黒浜期の住居跡とともにまとめた資料が出土している。後続する諸磯期以降の遺跡としては遺物包含層が検出された笹井の金井上遺跡、八木前遺跡があるが、近年八木上遺跡で前期終末の土器群と住居跡の検出があり注目されている（栗岡他 1995 金子他 1996）。

中期には遺跡数が大幅に増加し、発掘調査は実施していないが、表面採集から当該期の遺跡と考えられるものを含めると37遺跡を数える。最も著名な遺跡としては、笹井に位置する宮地遺跡があげられる。現在までに5回にわたって調査が実施され、縄文中期の住居跡が68軒検出され、その分布状況から双環状集落跡の存在が想定される（石塚 1997）。他に、柏原の丸山遺跡において勝坂期末から加曾利E II期に継続する比較的小規模の集落跡が調査されている。中期末では、字尻遺跡、揚櫛木遺跡、宮地遺跡で柄鏡形住居跡がそれぞれ検出されている。

後期の遺跡は16遺跡を数えるが、発掘調査が実施されたのは入間川左岸、柏原所在の高根遺跡のみで、中期終末から後期堀之内式期に継続する単独埋甕、土壙・ピット群が検出されている（小渕 1990）。なお、宮原遺跡では加曾利B式が、隣接する城ノ越遺跡で安行II式の土器片が表採されており、本調査実施が待たれる。

縄文時代晩期から弥生時代にかけては、本市は遺跡空白となっており、現在まで当該期の遺跡は確認されていない。

古墳時代の遺跡としては、笹井上古墳群、笹井古墳群、上広瀬古墳群、稻荷山公園古墳群がある。調査が実施されたのは笹井古墳群と上広瀬古墳群で、7世紀後半のものと考えられる。ただし、笹井古墳群は石室の構造が特異であるため、奈良時代以降の墳墓である可能性も否定できない。当該時代の集落遺跡として滝祇園遺跡が唯一の例となる。昭和56年度に調査が実施され、古墳時代後期の竪穴住居跡1軒が検出されている（小渕他 1983）。

奈良・平安時代の遺跡は、入間川両岸に帶状に連続して形成される。左岸は市北西より宮ノ越遺跡、今回報告の城ノ越遺跡、御所の内遺跡、小山ノ上遺跡、若干距離をおいて今宿遺跡、宮地遺跡と当該期の遺跡が濃密に分布しており、位置的・時期的に相互関連が十分に考えられる。これらの遺跡の対岸に、対峙するように稻荷上遺跡、坂上遺跡、揚櫛木遺跡、戸張遺跡、中原遺跡、峰遺跡、滝祇園遺跡が間断なく占地している。両岸の集落群は、ほとんどが靈亀2年（716）の高麗郡建郡以降の8世紀中頃より居住が開始されている。また、この時期は東八木窯跡群、東金子窯跡群の操業とも符合し、両者の密接な関係をうかがわせる。

中世の遺跡としては、鎌倉街道上道と主要支道である堀兼道が市域を貫いており、一部には道路状の切り通しが往時の遺構として残存している。また、この路線に沿って「まいまいづ井戸」と呼称される七曲井や堀兼井などの井戸跡が点在する。入間川左岸では、平成5年度に調査を行った柏原所在の小山ノ上遺跡で、幅6m、深さ2.8mを測る大規模な堀跡が検出された。また、本遺跡では昭和60年度の（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査でも館跡と考えられる堀跡が検出されており（中村 1988）、両者の関係が注目される。なお、隣接する鋳造遺跡とされる英遺跡でも同様の堀跡と、覆土中から15世紀末の内耳鍋が出土地している。

### III 城ノ越遺跡第7次調査

#### 1 調査の経過と成果

調査は個人住宅建設に伴うもので、原因者から平成2年11月2日に埋蔵文化財確認調査依頼書が提出された。これを受け市教育委員会直営で確認調査を平成2年11月5日から11月6日にかけて実施、堅穴住居跡1軒を確認した。確認調査の結果を依頼者に報告するとともに、即日本調査を開始。調査経過は以下のとおりである。

平成2年度

- 11月5日（月） 確認調査。グリッドを調査区内に任意座標で設定。市松状に人力で掘削。
- 11月6日（火） 調査区北側隅に奈良・平安時代の堅穴住居跡1軒を確認。
- 11月7日（水） 住居跡周辺を拡張。
- 11月8日（木） 拡張継続。遺構全域を確認。セクションベルトを設定し、掘り下げを開始する。東壁に粘土を貼ったテラス状施設を確認。
- 11月9日（金） 遺構掘り下げ継続。各区とも40cm強で床面に達する。セクション図作成。ベルト除去。
- 11月13日（火） 清掃して写真撮影。遺構平面図作成。竈調査開始。
- 11月14日（水） 竈セクション図、平面図作成。写真撮影。現場終了。機材撤収。

調査の結果、検出された遺構は奈良・平安時代の堅穴住居跡1軒のみである（第2図）。なお、遺構番号は昭和52年実施の第1次調査からの通し番号で、第13号住居跡となる。

#### 2 検出遺構

住居跡

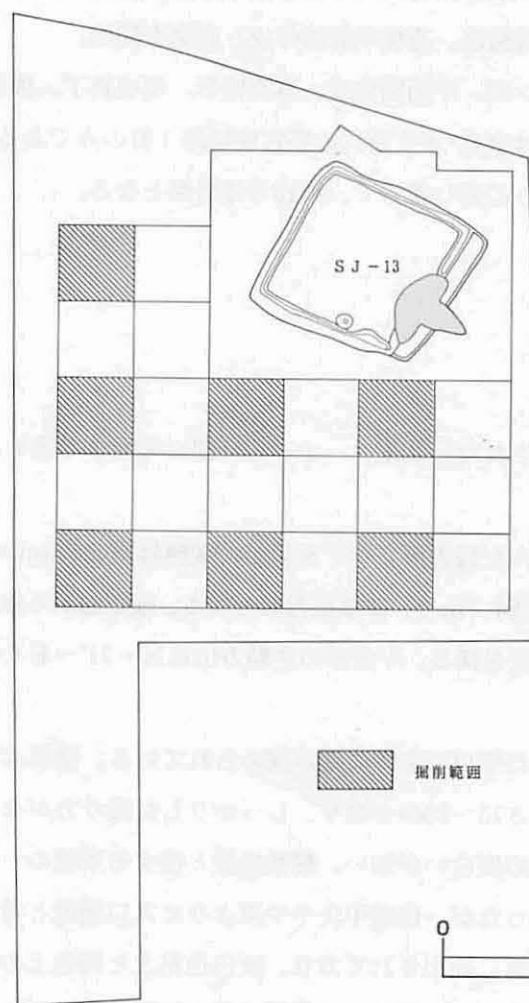
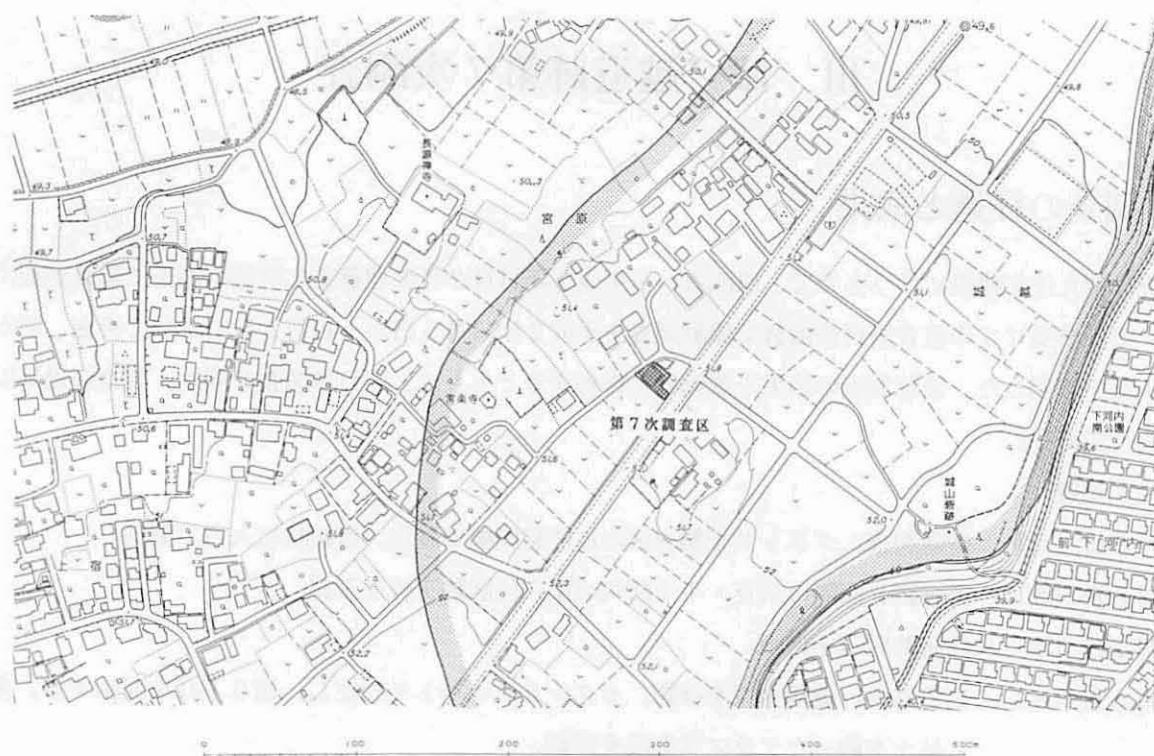
第13号住居跡（第3・4図）

本住居跡は調査区北隅で検出された。北東コーナーの一部に床面まで達する攪乱があるが、遺存状態は比較的良好である。

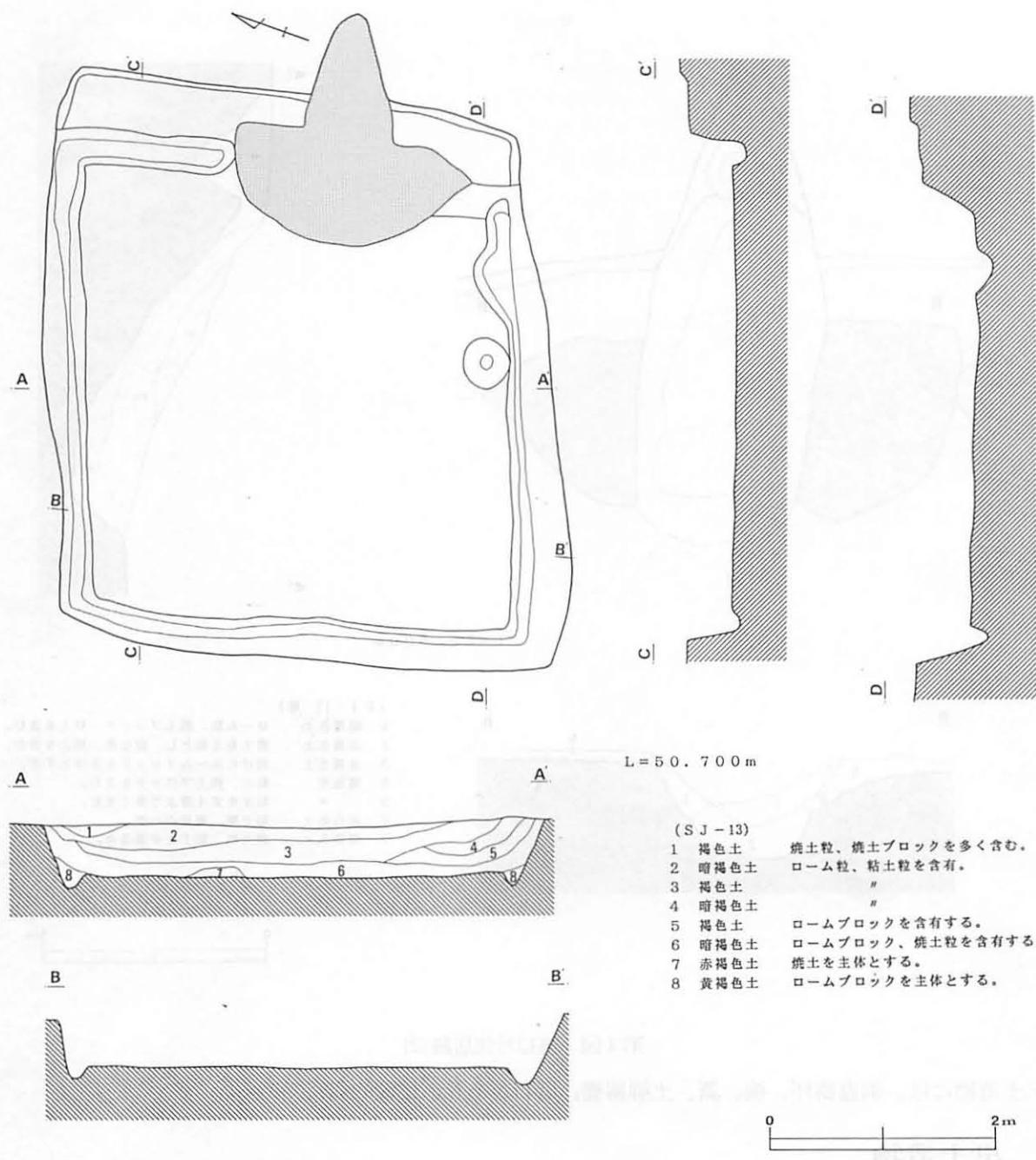
平面形は、東西に長いやや歪んだ長方形プランを呈し、規模は南北4.6m×東西5.1mを測る。ただし、東側の棚状施設部分を除けば東西4.7mで、ほぼ正方形となる。確認面から床面までの深さは、遺構中央部で50cm、周囲はやや浅く45cm前後を測る。平面形の主軸方位はN-71°-Eを指すが、竈の方位はおおよそ真東となっている。

床面は中央がやや深いが、概ね平坦で全体に踏み固められている。壁溝は竈両脇以外は全周し、一部広くなるが、大略幅20~25cm、深さ15~20cmを測り、しっかりした掘り方がなされている。壁はやや外反して立ち上がり、特に南壁は傾斜の度合いが強い。棚状施設と接する東壁の一部には灰白色粘土の付着が認められる。柱穴は検出されなかったが、南壁中央やや東よりに入口施設と考えられるピットが1ヵ所検出されている。棚状施設は東壁全体に作出されており、灰白色粘土と褐色土の混合土が貼られている。確認面からの深さは10cm前後、奥行は50cmを測る。食器等を置く施設と考えられる。

覆土は全体的に明るい色調を呈し、8層に分割される。第2層から4層にかけて粘土の混入が認められ、



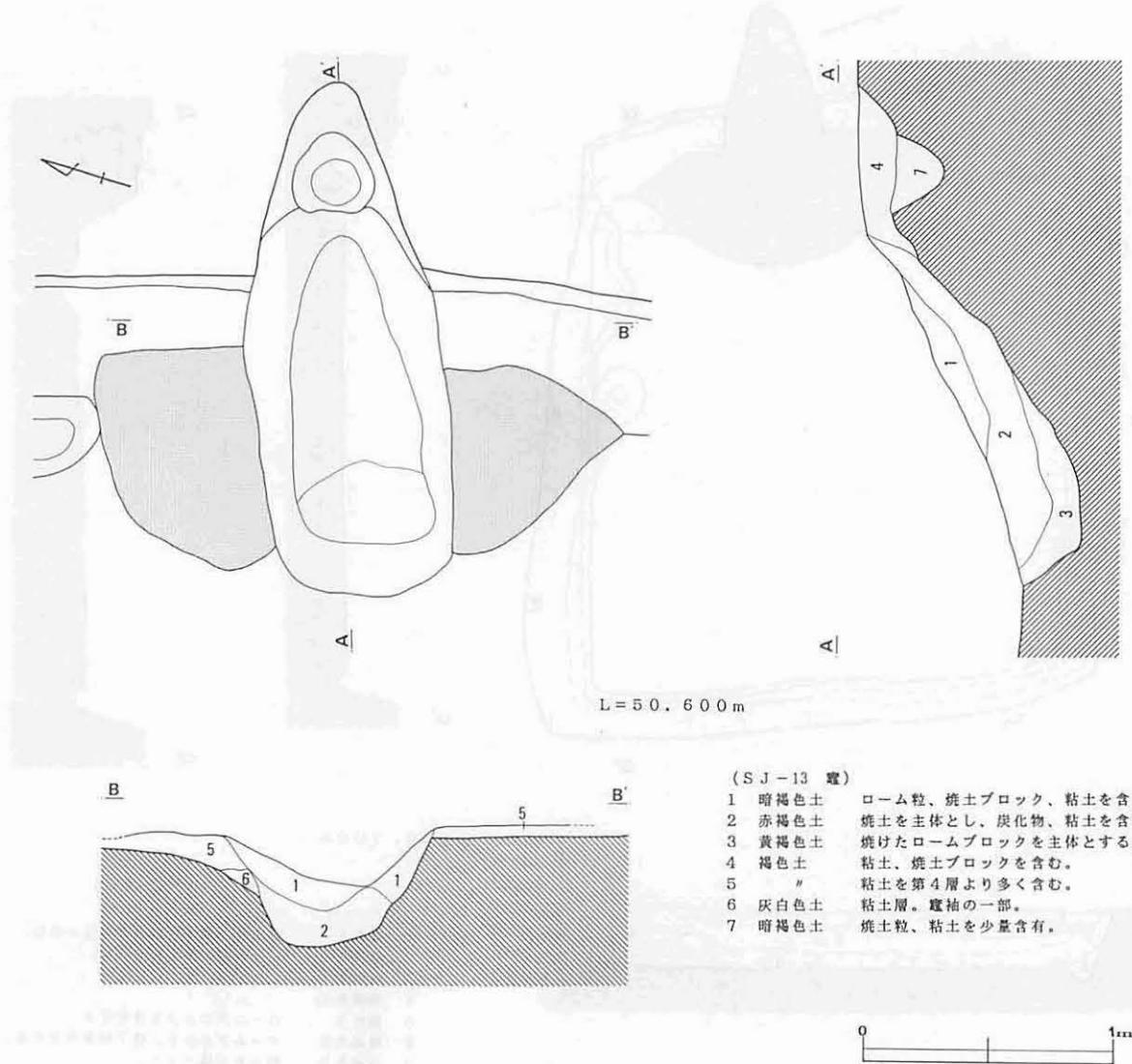
第2図 城ノ越遺跡第7次調査区位置図及び全測図



第3図 第13号住居跡(1)

竈や棚状施設の構造土が徐々に堆積していった状況が看取される。第7層は焼土を主体とするが、床面に掘り込みが見られないことから、炉と認定し得なかった。遺物は各層から散乱した状態で出土しており、偏った傾向は認められない。

竈は東壁やや南よりに構築されている。両袖間は2.2m、各袖は幅70cmを測り、灰白色粘土を使用してしっかりとした作りである。焚口先端から煙道先端までは2.1m、火床部から煙道にかけて緩やかに立ち上がる。火床部の幅は80cmを測る。煙道部にはピットが穿たれている。覆土は棚状施設のものを含めて7層に分けられた。中央部を被覆する第1～3層は粘土含有が顕著でなく、天井部は住居廃棄時に破壊されたものと考えられる。両袖から棚状施設にかけては連続性が感じられる構造を呈しており、構築時の同時性が認められる。竈内からの出土遺物は少なく、須恵器、土師器の小破片のみである。



第4図 第13号住居跡(2)

出土遺物には、須恵器壺、椀、蓋、土師器甕、砥石があり、比較的豊富である。

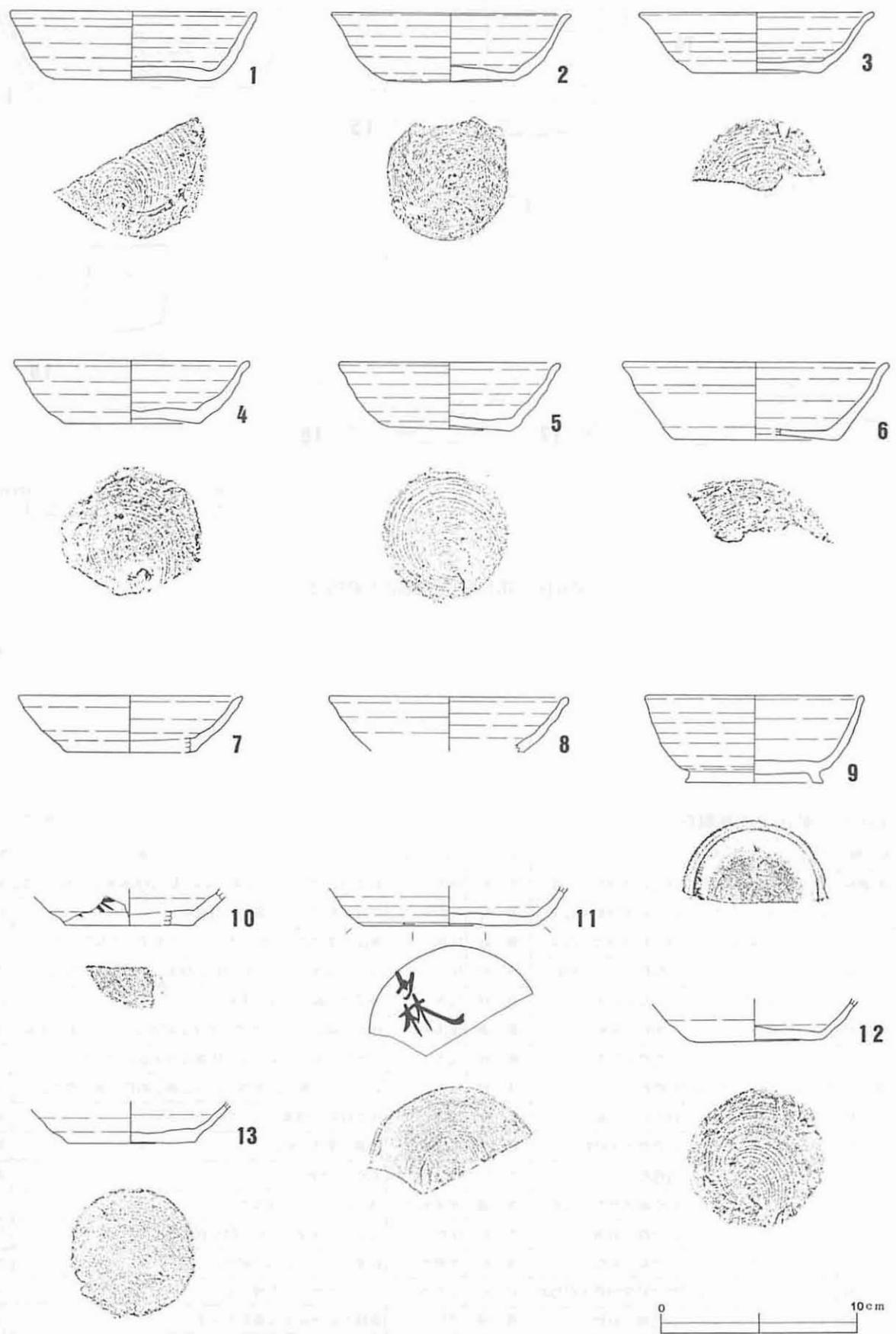
### 3 出土遺物

#### 第13号住居跡出土遺物 (第5・6図)

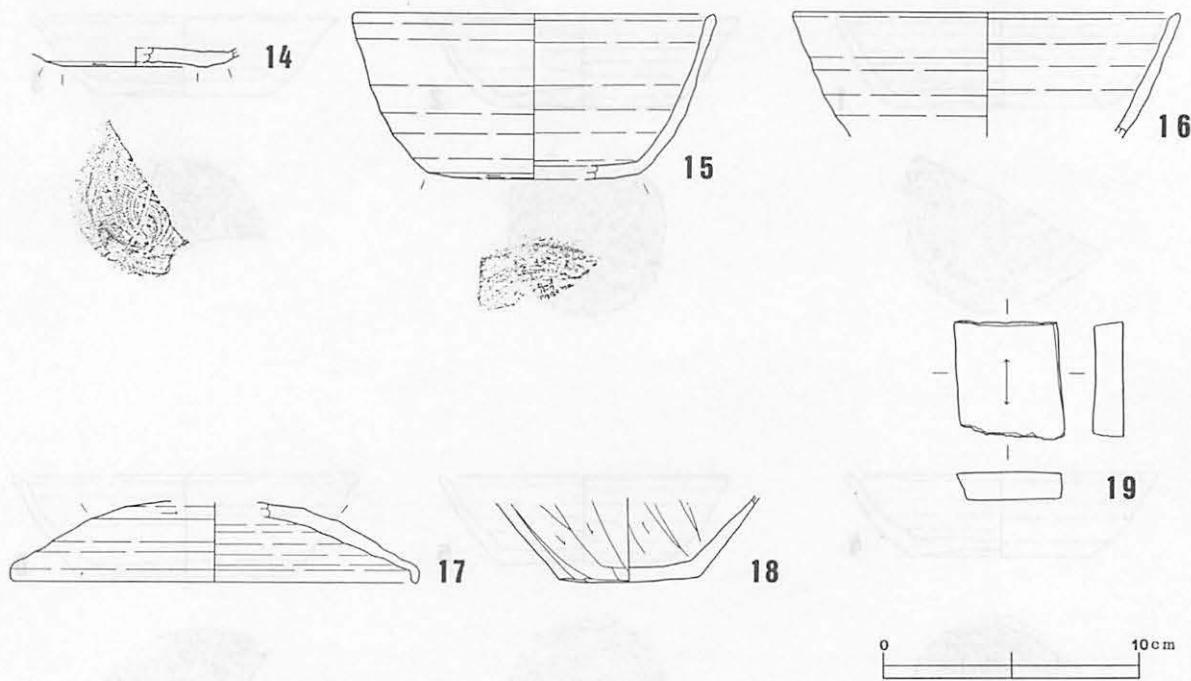
遺物総量は比較的多い。ただし、確認調査時の出土遺物も周辺の状況と接合関係から本跡のものとした。

須恵器壺14個体の他、椀、蓋、土師器甕、砥石を図示する。

第5図1～13、第6図14は須恵器壺で、9には高台が付く。底部はいずれも回転糸切り。1～3、12が南比企産で、他は東金子産と考えられる。法量は口径が推定も含めて、11.1～13.5cm、底径が6.4～8.9cm、器高2.2～4.4cmを測る。器形は、2～4は口唇部が外反するが、他はほぼ直線的に立ち上がる。8は糸切り後の粘土塊との接合痕を残す。10・11には墨書が認められる。15・16は椀で、15は南比企産である。18は土師器甕で、底部のみ残存。19は砥石で、各面とも良く使い込まれている。



第5図 第13号住居跡出土遺物(1)



第6図 第13号住居跡出土遺物(2)

第13号住居跡出土遺物観察表

(単位: cm)

No	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	特徴	残存率
1	須恵器壺	(12.7)	(8.0)	3.5	白色針状物質・石英	良好	灰色	底部付近はやや丸みを帯びるが体部は直線的に立ち上がる。	30%
2	〃 壺	(12.3)	6.6	3.5	白色針状物質・石英	良好	灰色	口唇部若干外反。底部中央厚手。	65%
3	〃 壺	(12.0)	6.6	3.1	白色針状物質・石英	良好	灰色	体部下部で若干内湾したのち、上半部から外反する。	35%
4	〃 壺	12.1	7.0	3.2	白色粒・石英・砂粒	良好	灰色	底部から体部下半部にかけて厚手。口唇部若干外反。	75%
5	〃 壺	11.4	6.4	3.5	白色粒・石英	良好	灰色	体部は直線的に立ち上がる。	80%
6	〃 壺	13.5 (6.8)	2.9	2.9	白色粒・砂粒	普通	淡灰色	体部は直線的で、口唇部はわずかに外反する。底部大きめ。	40%
7	〃 壺	(11.5) (6.8)	2.9	2.9	白色粒・石英	良好	灰色	やや低い器形を呈する。体部はわずかに内湾する。	30%
8	〃 壺	(12.4)	—	(2.8)	白色粒・石英	良好	灰色	器形、7に類似。下端部には底部との接合痕を残す。	20%
9	〃 高台壺	11.1	7.0	4.4	白色粒・砂粒	良好	灰色	体部は若干内湾しつつ立ち上がる。	45%
10	〃 壺	—	6.6	(1.9)	白色粒子・砂粒	普通	淡灰褐色	墨書。字体不明。	20%
11	〃 壺	—	(8.9)	(2.0)	白色粒	良好	灰白色	墨書。「少林」?	40%
12	〃 壺	—	6.6	(2.2)	白色針状物質・石英	普通	灰茶褐色	体部薄手。やや直線的。	70%
13	〃 壺	—	6.6	(2.2)	白色粒・石英	良好	灰色	底部から体部にかけて段を有する。	75%
14	〃 壺	—	5.7	(0.7)	白色粒・砂粒	良好	灰褐色	底部に「×」のヘラ記号。	35%
15	〃 梗	(14.4) (8.3)	6.4	白色針状物質・白色粒	良好	淡灰色	体部下半部やや内湾する。	10%	
16	〃 梗	(15.1)	—	(4.8)	白色粒・砂粒	普通	淡灰色	直線的に外反する器形を呈する。	20%
17	〃 蓋	(15.8)	—	(3.2)	白色粒・砂粒	普通	灰褐色	体部の一部のみ残存。摘の形状は不明。	30%
18	土師器甕	—	5.6	(3.3)	赤色粒・石英・砂粒	良好	褐色	底部のみ残存。斜位のヘラ削りが認められる。	50%
19	砥石	長さ 4.7 幅 4.2 厚さ 1.2						両面とも良く使い込まれている。やや湾曲している。	—

## IV 城ノ越遺跡第8次調査

### 1 調査の経過と成果

調査はほ場整備に伴うものである。平成2年度に農務課より、ほ場整備事業予定地に関わる埋蔵文化財の照会があった。市教育委員会は予定地内が埋蔵文化財に該当することを回答するとともに、発掘調査経費を予算化した。周知の遺跡である上に、遺物散布が濃密であるため事前確認調査は行わず、直接発掘調査を実施することで同意し、日程の調整を行った。発掘調査は、平成3年5月21日から10月15日にかけて実施した。調査経過の概略は以下のとおりである。

平成3年度

5月21日（月）～6月25日（火）

A～C区の、表土除去作業を行う。調査区は既に農道として使用されているため、碎石が撒かれており、これを表土と分けて搬出するため、掘削は予想以上に難航する。

6月26日（水）～7月10日（水）

遺構確認作業を行う。A区で掘立柱建物跡3棟、住居跡1軒を確認。B区では近・現代の溝と住居跡1軒、C区では土壙数基を確認。

7月11日（木）～7月19日（金）

担当者研修のため、現場休止。

7月22日（月）～8月22日（木）

A区調査、第15号住居跡、第6～8号掘立柱建物跡、第50・51号土壙調査終了。途中、B区の調査も並行して実施。

8月26日（月）～9月17日（火）

B区、C区調査。第14号住居跡、第48・49・52～54号土壙調査を終える。D・E区表土除去。D区は遺構なし。E区では溝1条確認。

9月18日（水）～10月15日（火）

E区調査実施。第5号溝調査終了。機材撤収。現場作業終了。

調査の結果、検出された遺構は奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒と掘立柱建物跡3棟、土壙7基、溝1条である（第8図）。なお、遺構番号は昭和52年実施の第1次調査からの通し番号である。

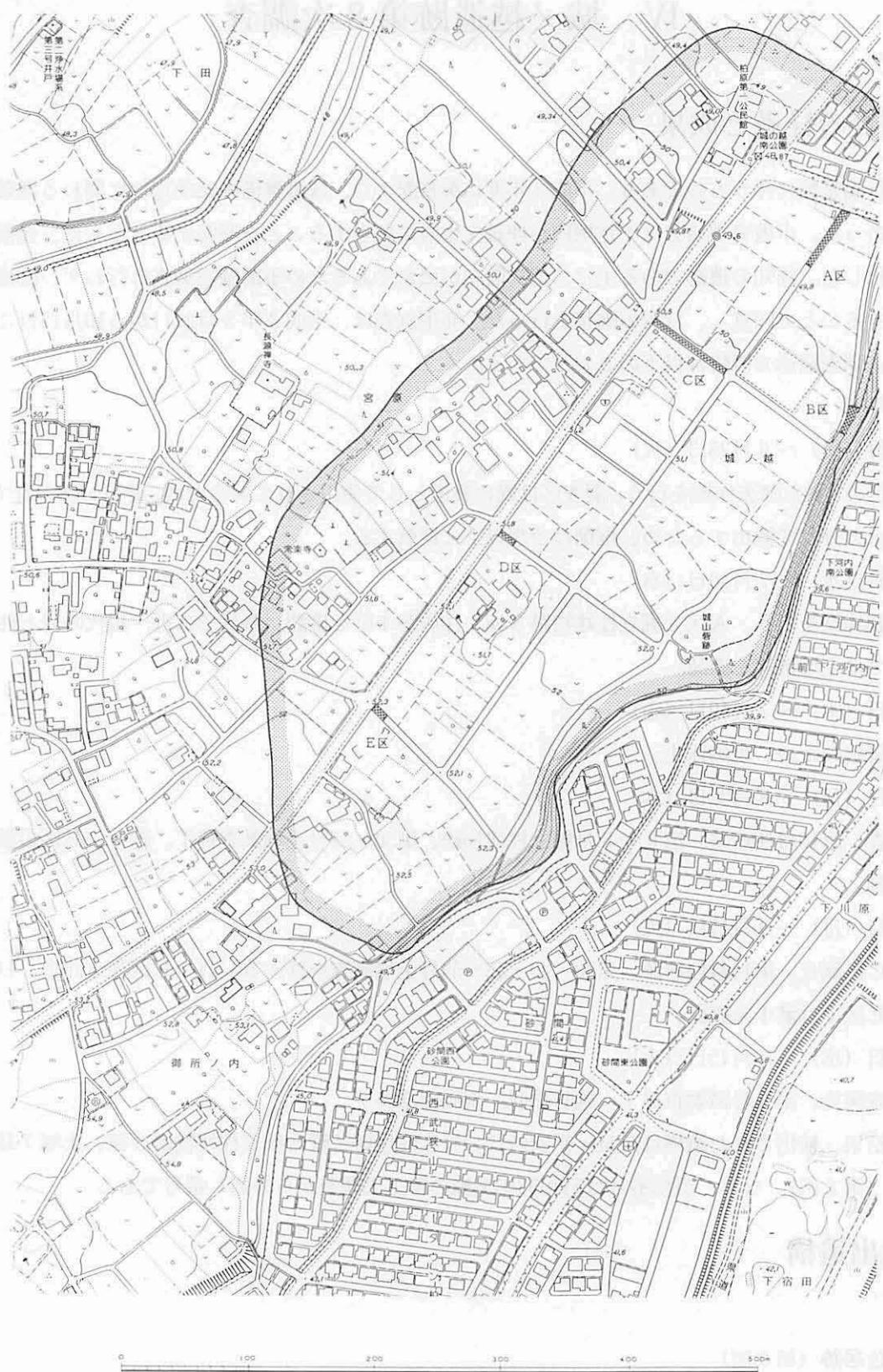
### 2 検出遺構

#### 住居跡

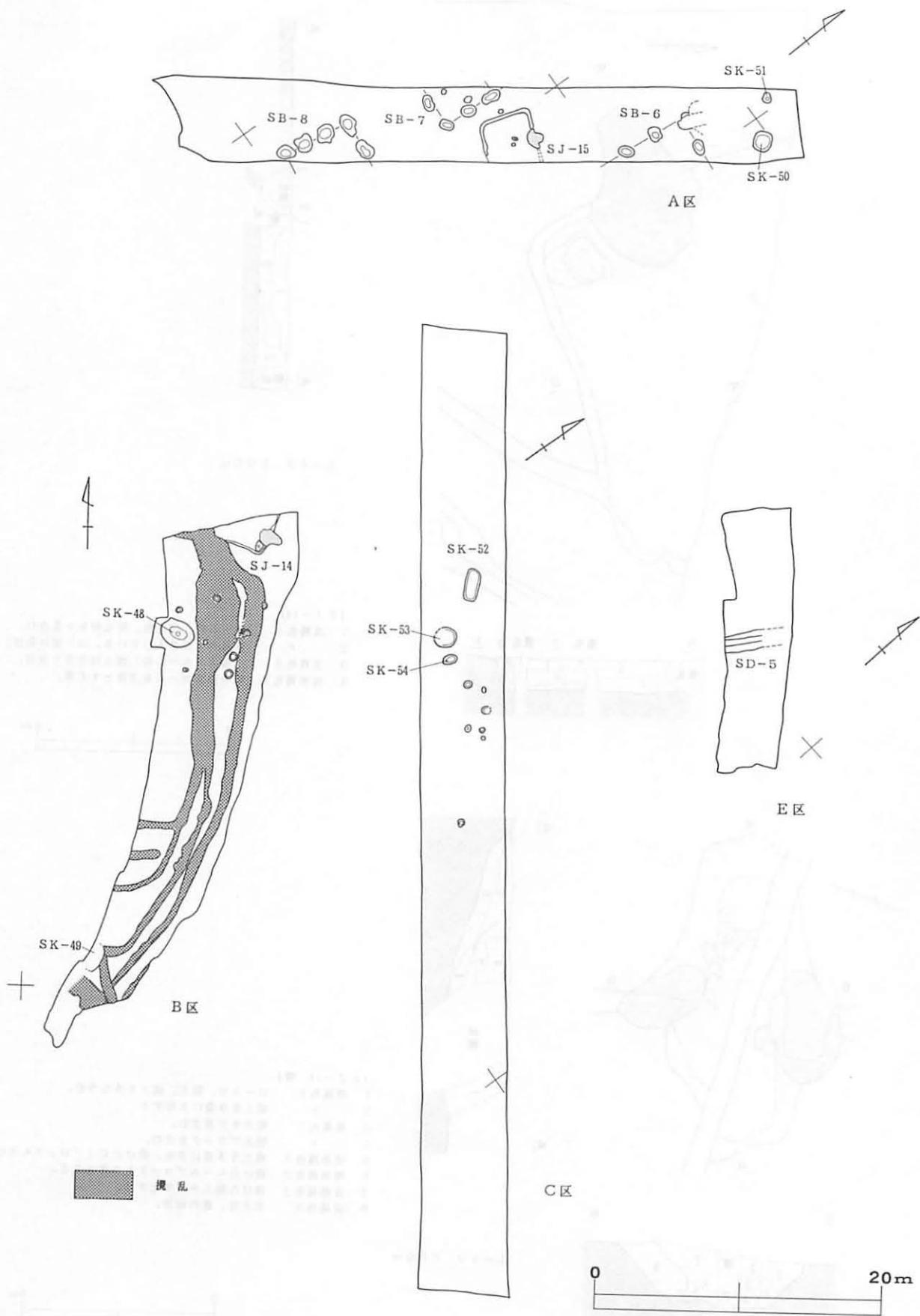
##### 第14号住居跡（第9図）

本住居跡は、B区北隅で検出された。本区は広範囲に渡って牛蒡掘削痕、近・現代の根切り溝あるいは地境溝によって破壊されている。本住居跡も南西コーナー及び西壁がこれらの攪乱を受けており、遺存状態は極めて悪い。なお、遺構の西壁の大部分と北壁及び北東コーナーは調査区外にある。

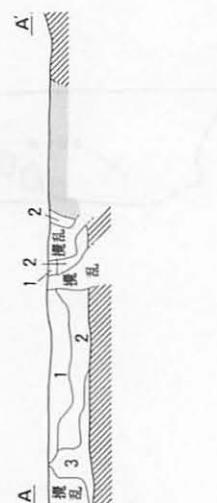
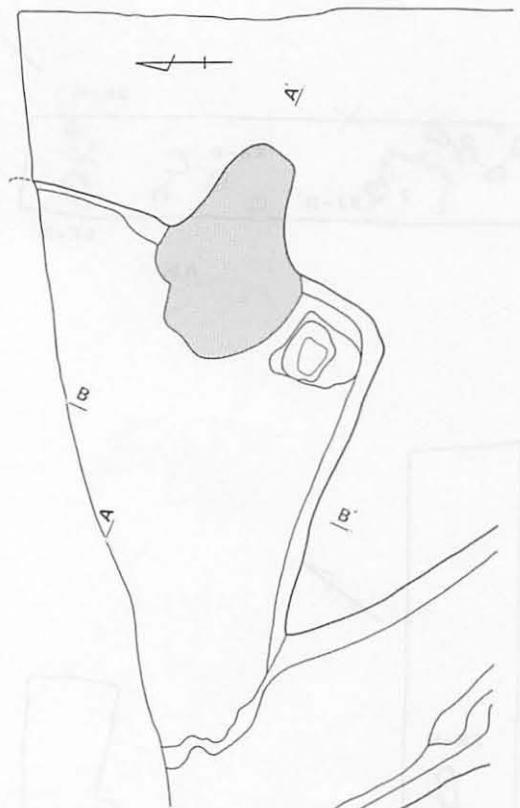
平面形は、遺構の約1/2が調査区外にあり、南西コーナー付近が破壊されているため平面形は明確にし得



第7図 城ノ越遺跡第8次調査区位置図



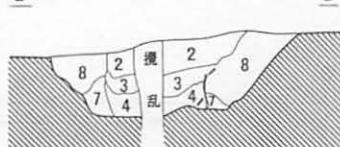
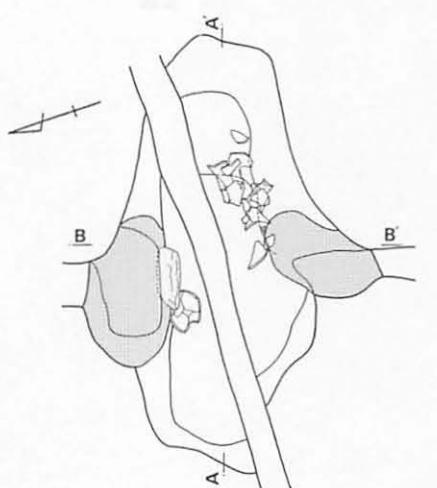
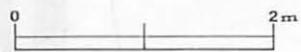
第8図 城ノ越遺跡第8次調査区全測図



L = 49.500 m

(S J - 14)

- |         |                     |
|---------|---------------------|
| 1 黒褐色土  | ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含む。  |
| 2 "     | 茶褐色土が混入している。赤が強い色調。 |
| 3 茶褐色土  | 上層よりローム粒、焼土粒を多く含有。  |
| 4 暗黄褐色土 | 壁の崩落ロームを主体とする層。     |



L = 49.500 m

(S J - 14 窟)

- |         |                        |
|---------|------------------------|
| 1 暗褐色土  | ローム粒、粘土、焼土を多く含む。       |
| 2 "     | 焼土を多量に含有する。            |
| 3 黒褐色土  | 粘土を少量含む。               |
| 4 "     | 焼土ブロックを含む。             |
| 5 明赤褐色土 | 焼土を多量に含有。焼けた粘土ブロックも含む。 |
| 6 暗赤褐色土 | 焼けたロームブロックを主体とする。      |
| 7 灰赤褐色土 | 焼けた粘土を主体とする。           |
| 8 灰褐色土  | 粘土層。窟の袖部。              |



第9図 第14号住居跡

ない。ただし、東壁北側がやや湾曲しコーナーが近いと考えられるため、東西にやや長い長方形プランを呈するものと思われる。規模は推定で南北3.5m、東西4.0m、確認面からの深さ30～35cmを測る。主軸方位はN-107°-Eを示し、竈の方位も一致する。

床面は概ね平坦であるが、竈正面、中央部以外は軟弱であった。壁際は一部貼床がなされている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝及び柱穴は認められなかった。竈右脇からは、長径60cm、短径55cmの平面形不整形のピットが検出されている。床面からの深さ22cmを測る。位置から考えれば貯蔵穴的性格が考えられるが、平面形、断面ともに不整であるため断定できない。

覆土は3層に分割された。全体に明るい色調で、比較的フラットな堆積状況を呈する。遺物包含量はいずれの層も少なかった。

竈は東壁に構築されていた。中央にトレンチャーの攪乱を受けており、遺存状態は不良である。規模は両袖間1.2m、遺存状態の比較的良好な左袖の幅は38cmを測る。構築土は灰白色粘土に若干の褐色土を混ぜたものを使用している。また、左袖内側には、補強材と考えられる河原石が密着していた。煙道は外側への突出が顕著で、火床部から緩やかに立ち上がる。焚口から煙道先端までの長さは1.6mを測る。火床部は幅45cmで、使い込まれており良く焼けていた。土層は8層に分けられる。火床部と煙道部からは、土師器甕と台付甕が出土している。

出土遺物には、須恵器壺、皿、長頸壺、土師器甕、台付甕があり、比較的少ない。

#### 第15号住居跡（第10図）

本住居跡は、A区中央で検出された。遺構の西側は調査区外にある。北側に第6号掘立柱建物跡、西側に第7号掘立柱建物跡が位置している。

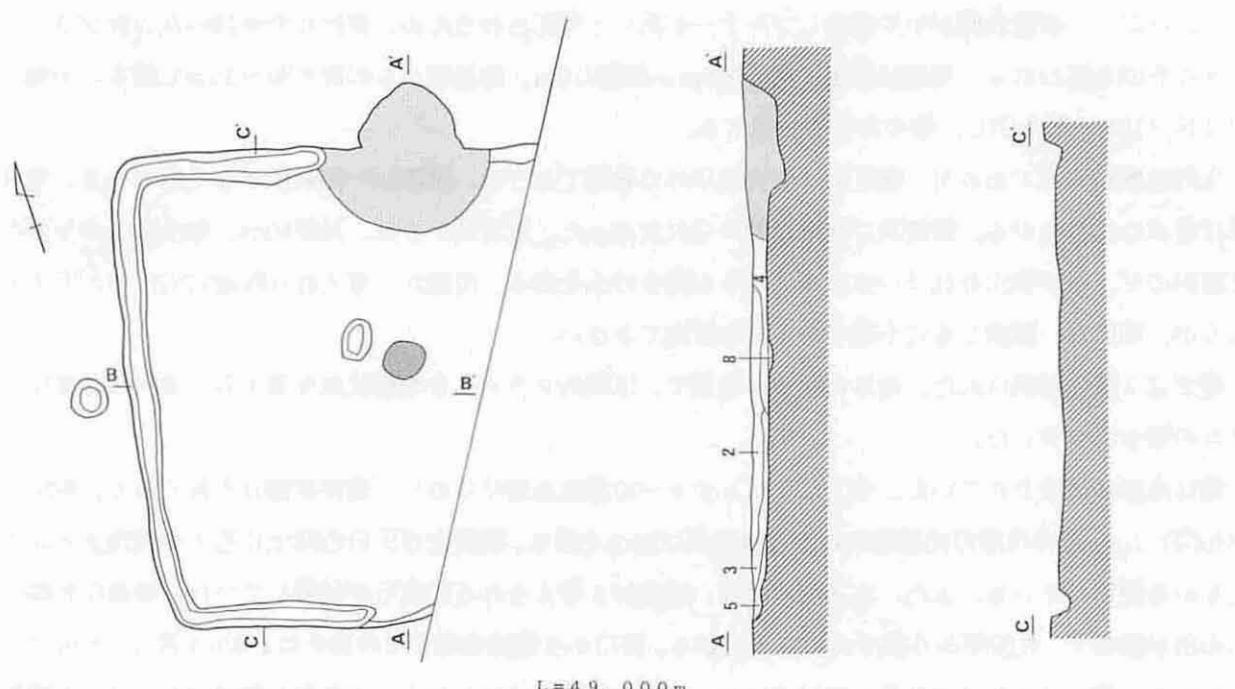
平面形は、遺構の約1/4が調査区外にあるため明確にし得なかつたが、竈が北壁の中央に位置するものと想定すれば、東西が若干長い方形プランを呈するものと思われる。南北4.0m、東西は推定で4.4m、深さは浅く、確認面から15～20cmを測る。主軸方位はN-9°-Eを示す。

床面は概ね平坦で全体に渡って堅く踏み締められていた。壁際の一部に貼床がなされている。壁はわずかに傾斜して立ち上がる。壁溝は検出された範囲では、南壁の一部以外全周する。幅は15～25cm、深さ15cmを測る。柱穴は検出されなかつたが、遺構中央に深さ12cmの浅いピットが位置する。また、ピットの右側から炉跡が検出されている。

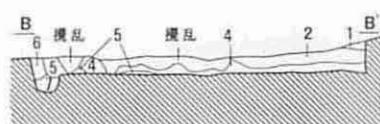
覆土は8層に分割された。全体に褐色を基調とした明るい色調を呈し、比較的フラットな堆積状況を示す。遺物包含量は比較的多かった。

竈は北壁に構築されていた。遺存状態は概ね良好である。規模は両袖間1.5m、袖の幅は50cm前後を測る。構築土は暗い色調の灰色粘土を使用している。煙道は短く、火床部から緩やかに立ち上がる。焚口から煙道先端までの長さは1.2mを測る。火床部は幅55cmで、良く焼けていた。土層は8層に分けられる。火床部覆土中から、須恵器壺が出土している。

出土遺物には、須恵器壺を中心に、椀、長頸壺、土師器台付甕がある。

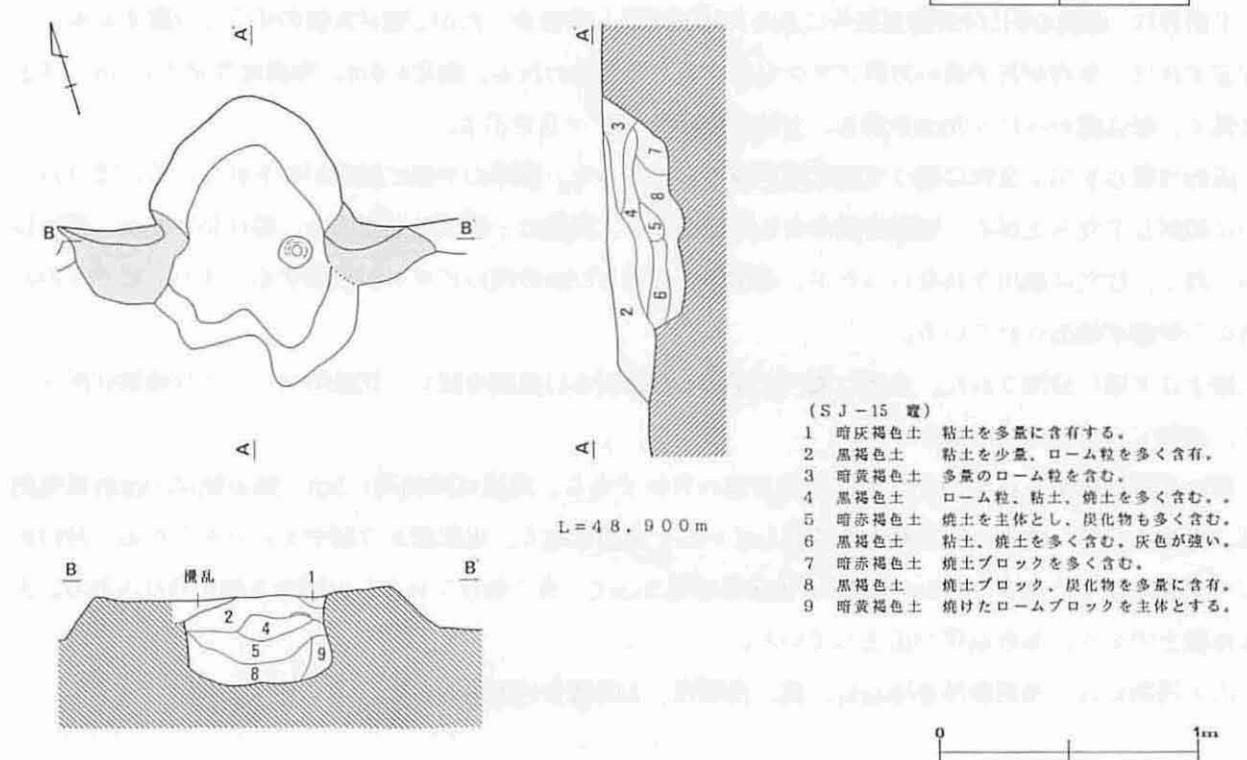


L = 49,000 m

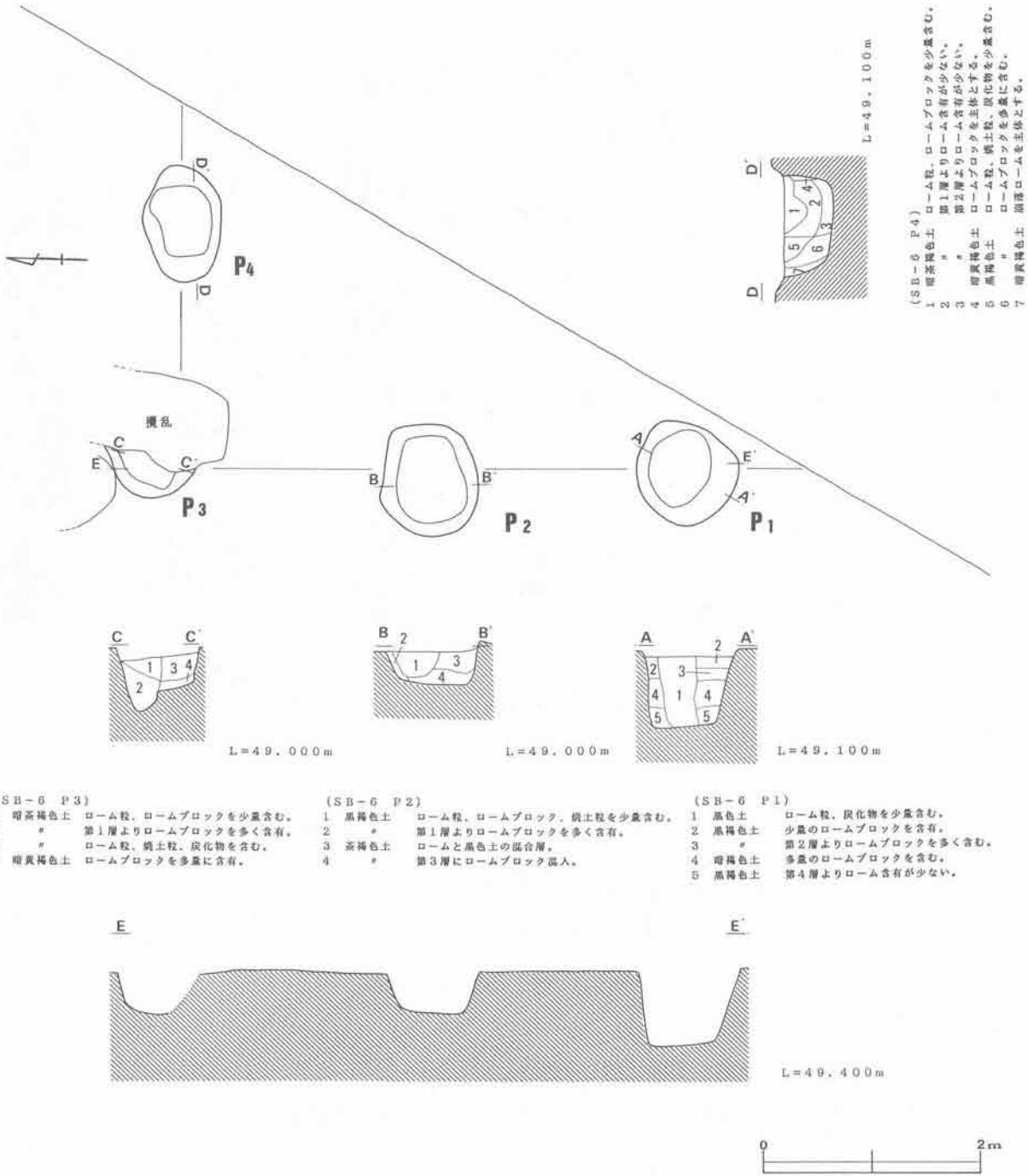


- (SJ-15)
- 1 暗茶褐色土 ローム粒、燒土粒、炭化物を含有。
  - 2 " ロームブロックを含む。
  - 3 " 多量のローム粒、ロームブロックを含む。
  - 4 黒褐色土 ローム含有が他の層より少ない。
  - 5 暗茶褐色土 多量のローム粒を含有。
  - 6 " 第5層に類似するが、ロームブロックが混入する。
  - 7 暗黄褐色土 ロームブロックを主体とする。
  - 8 暗赤褐色土 燃土を主体とする。

2m



第10図 第15号住居跡



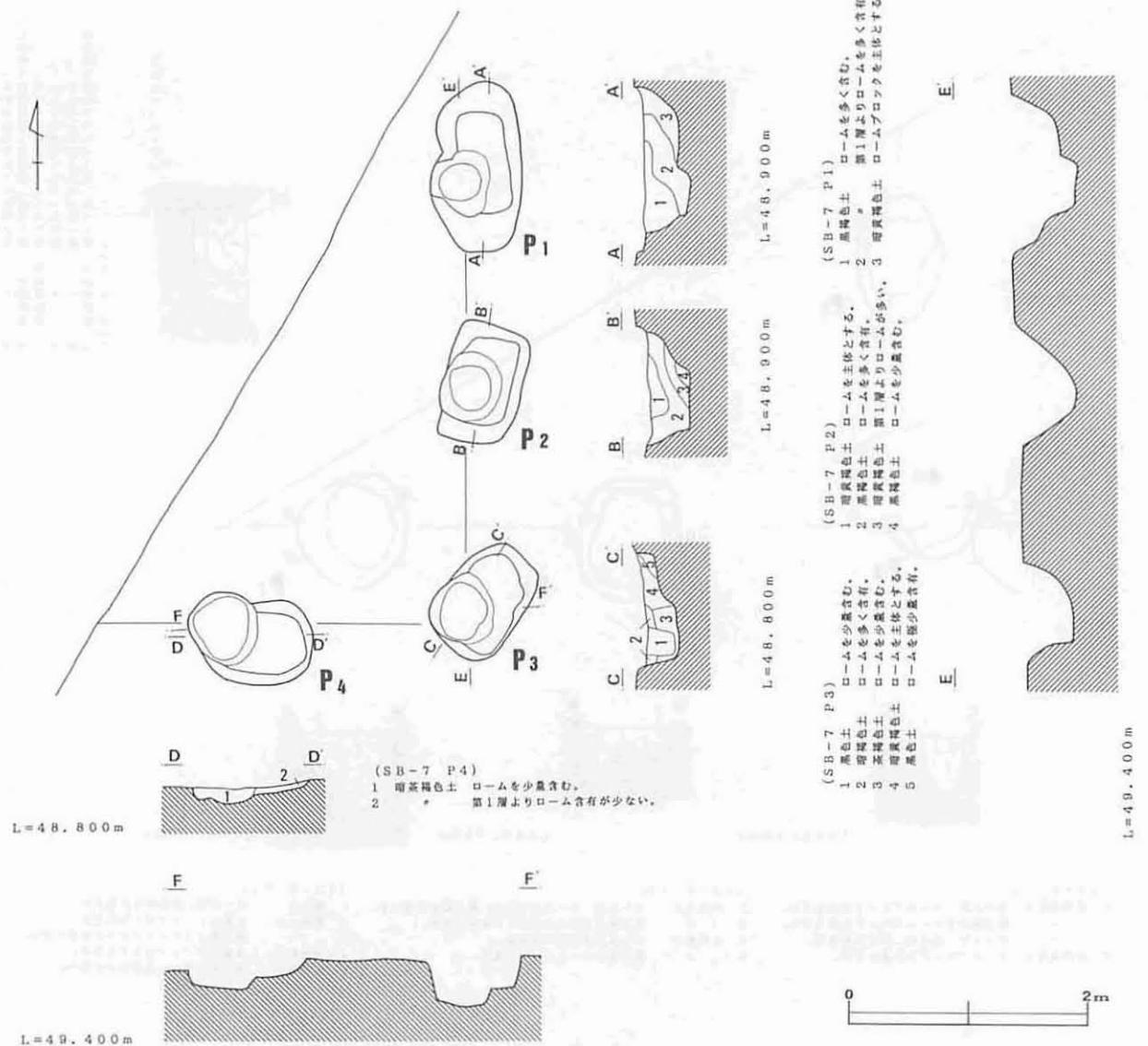
第11図 第6号掘立柱建物跡

### 掘立柱建物跡

#### 第6号掘立柱建物跡（第11図）

本遺構は、A区北側で検出された。南側には第15号住居跡が位置する。北側のP<sub>3</sub>は芋穴状の攢乱によって破壊されている。

検出された柱穴は、北側の2ヵ所と西側の3ヵ所で、東側は不明であるが配置状況から南北に長軸を有する2間×3間の建物である可能性が高い。長軸の主軸方位は、ほぼ真北を指している。柱穴は、いずれもやや不整な橢円形プランを呈する。規模は長径95~110cm、短径75~90cm、深さは40~70cmを測る。断面



第12図 第7号掘立柱建物跡

形は台形を呈する。

覆土は一部に版築の跡と柱痕を明確に残していた。

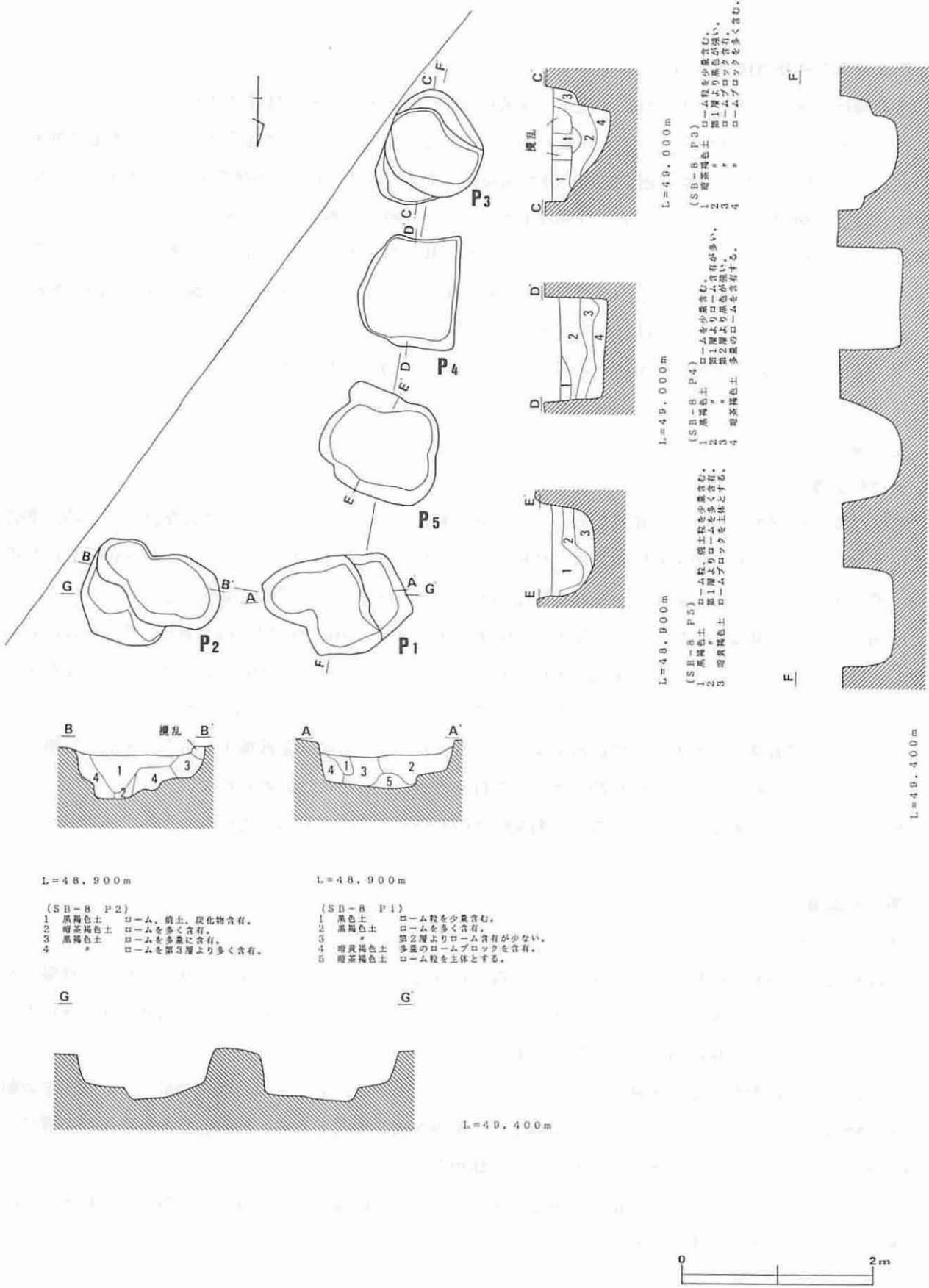
出土遺物には須恵器、土師器の小破片があるのみで、図示し得る遺物は皆無であった。

#### 第7号掘立柱建物跡（第12図）

本遺構は、A区中央で検出された。東側には第15号住居跡が位置する。

検出された柱穴は、東側の3ヵ所と南側の2ヵ所である。西側は調査区外にあるため断定は出来ないが、配置状況から第6号掘立柱建物跡と同様、南北に長軸を有する2間×3間の建物と推定される。梁行、桁行とともに不明であるが、柱抜痕から推定される柱間は大略1.8mを測る。長軸の主軸方位は、ほぼ真北を指し、この点でも第6号掘立柱建物跡に類似する。各柱穴は、やや不整な楕円形プランを呈し、いずれも不整円形の柱抜痕を残す。規模は長径100~145cm、短径70cm前後、深さは10~40cmを測る。断面形は台形を呈する。

覆土は、ほとんどが自然堆積の状況を呈しており、柱抜去後は放置されていたかのような印象を受ける。



第13図 第8号掘立柱建物跡

出土遺物は須恵器、土師器の小破片があるので、図示し得る遺物は無かった。

#### 第8号掘立柱建物跡（第13図）

本遺構は、A区南側で検出された。北側には第15号住居跡と第7号掘立柱建物跡が位置する。

検出された柱穴は、北側の2ヵ所と西側の4ヵ所である。東側と南側は調査区外にある。断定は出来ないが、柱穴の配置状況から他の掘立柱建物跡と同規模と考えられる。梁行は不明であるが、桁行は6.2mを測る。柱痕が検出されていないため、柱間は不明である。長軸の主軸方位は、N-6°-Eを指している。各柱穴は不整形プランを呈しているが、P1～3は柱穴抜去痕が重複しているものと考えられる。ただし、P4・5からも柱痕は検出されなかった。規模は長径95～115cm、短径110cm前後、深さは40～70cmを測る。覆土はP1～3は自然堆積、他は版築状を呈している。

出土遺物は須恵器、土師器の小破片があるので、図示し得る遺物は無かった。

### 土 壤

#### 第48号土壙（第14図1）

B区北側に位置する。当初、井戸と考えたが、中途半端な深さと覆土が硬質で他の奈良・平安時代遺構の覆土とも異なるため、縄文時代の陥穴と判断した。なお、南に23mの地点にはプランのみ確認した第49号土壙がありボーリングの結果、かなりの深度があると思われるため、同種の遺構とした。

平面形はやや不整な楕円形プランを呈する。長径2.3m、短径1.8m、深さ1.5mを測る。断面形は台形を呈し、壁は急角度で立ち上がる。壙底は平坦であるが、長径1.3m、短径0.8mで上端に比してかなり小さくなっている。中央には径30cmのピットが穿たれている。壙底からの深さは55cmを測る。

覆土は、同種遺構の典型的な堆積状況を呈している。特に壁から壙底を被覆する第7・8層は特徴的である。また、第1層のみ若干の炭化物と焼土を含有するが、他の層には認められない。

出土遺物は皆無であるが、その特徴から縄文時代のものとするのが妥当と思われる。

#### 第50号土壙（第14図2）

A区北東に位置する。

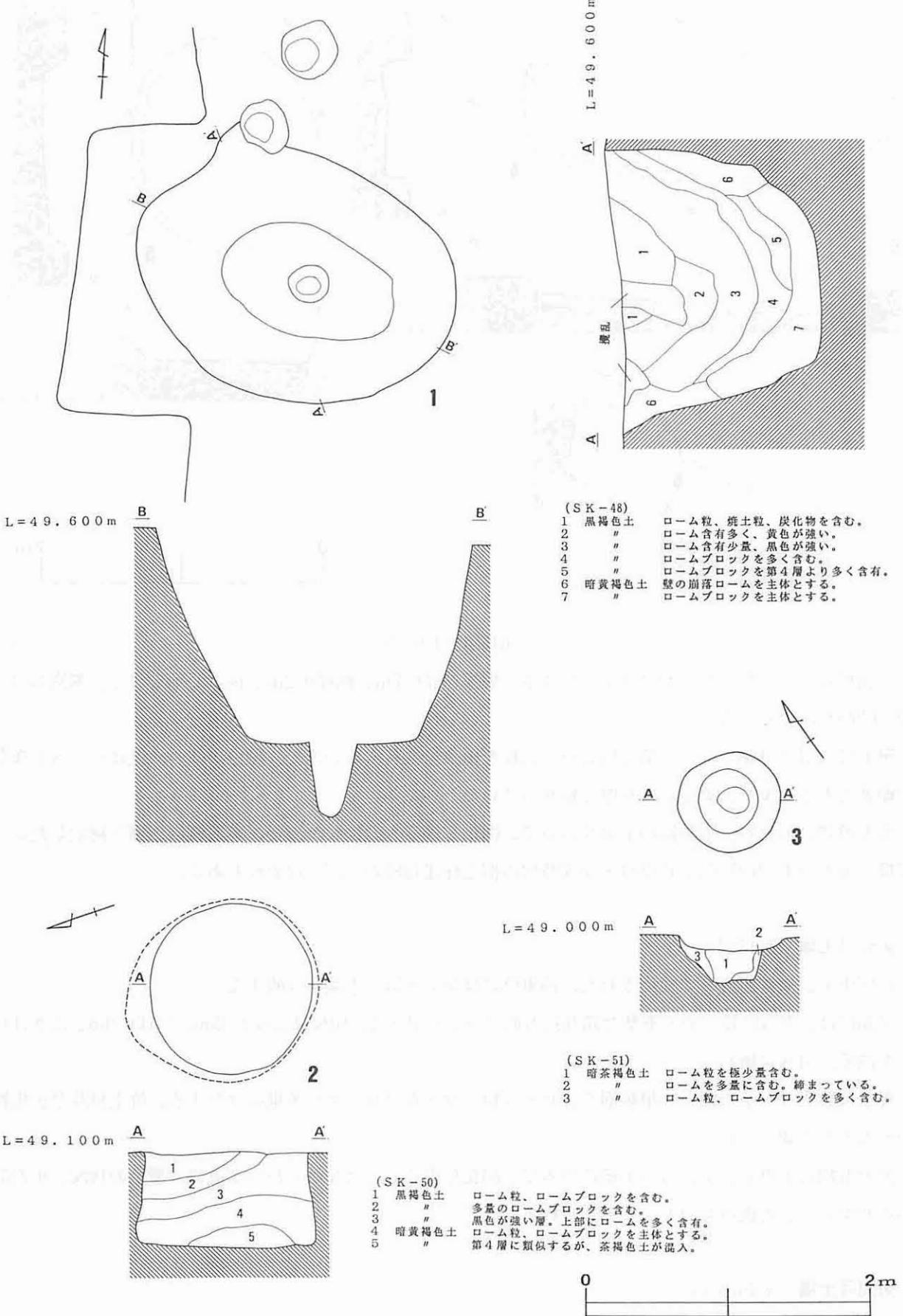
平面形はやや不整な円形プランを呈する。上端径1.2m、底径1.4m、深さ70cmを測る。断面形は壙底がやや広い台形を呈し、壁は部分的に若干オーバーハングする。このオーバーハングは当初周囲全体にあったものと考えられる。壙底は平坦で、軟弱である。

覆土は、上部は黒褐色土を主体として、ロームブロックの多少により互層的堆積が見られる。下部の第4・5層はローム粒、ロームブロックを主体とし、黄色が強く軟弱である。特徴的なのは下部の2層で、掘削後それほど間をおかずに埋め戻されたような様相を呈している。

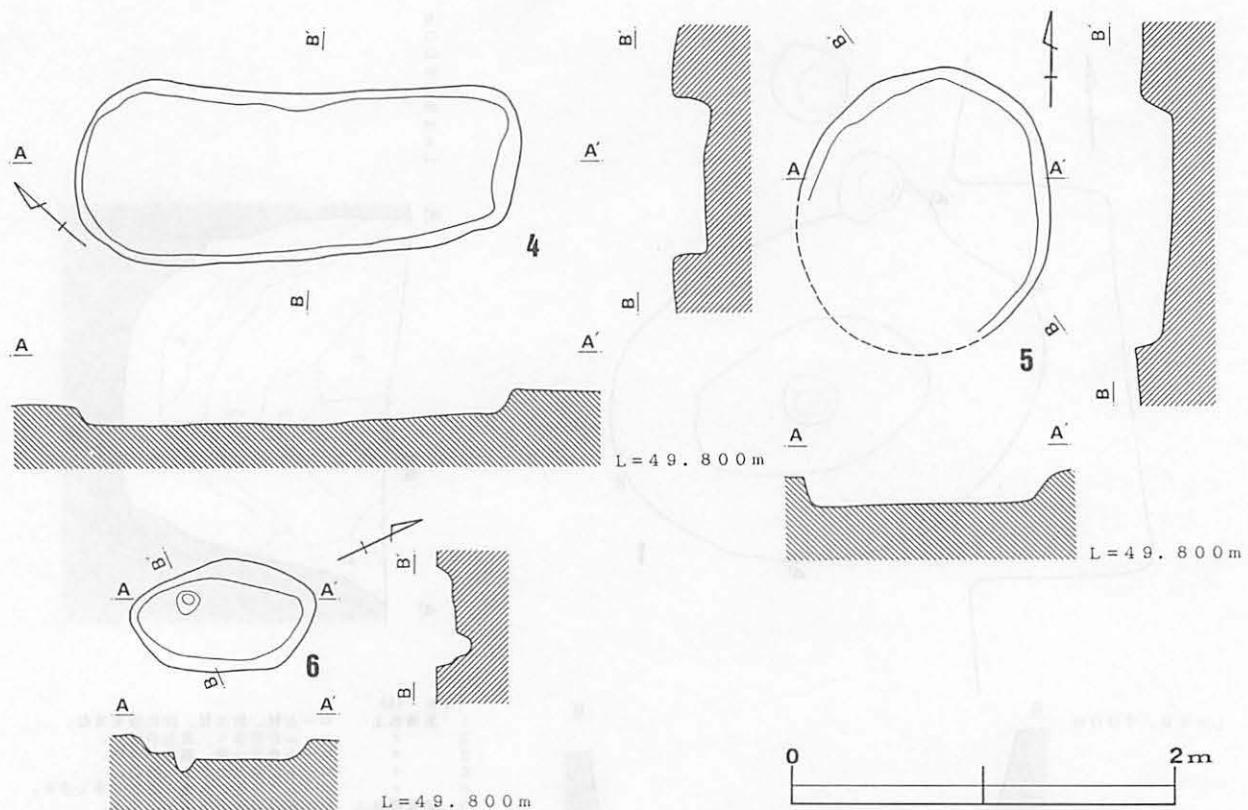
出土遺物は須恵器、土師器の小破片のみで、図化し得るものはなかった。覆土の特徴から奈良・平安時代あるいは中世の所産と考えられる。

#### 第51号土壙（第14図3）

A区北東から検出された。東側には第50号土壙が位置する。



第14図 土壌(1)



第15図 土壙(2)

平面形は小形の整った円形プランを呈する。規模は径0.7m、底径0.2m、深さ35cmを測る。壙底には、やや凹凸が認められる。

覆土は3層に分割される。第1層はローム粒を極少量含有するのみで、黒色が強い。他はロームの含有が顕著である。また、第1層より堅く締まっていた。

出土遺物は須恵器、土師器の小破片のみで、図化し得るものはなかった。本遺構は土壙と認定したが、規模と覆土第1層の特徴から奈良・平安時代の掘立柱建物跡の一部の可能性もある。

#### 第52号土壙（第15図4）

C区中央、やや西寄りで検出された。南東側には第53・54号土壙が位置する。

平面形は、東西に長いやや不整な隅丸長方形プランを呈する。規模は長径2.35m、短径0.9m、深さは15cmを測る。壙底は概ねフラットである。

覆土は軟弱な明茶褐色土の単純層で、ローム粒、ロームブロックを多量に含有する。焼土粒及び炭化物の混入も若干認められた。

出土遺物は須恵器、土師器の小破片のみで、図化し得るものはなかった。本遺構は覆土の状況、平面形から勘案して、近世以降のものと考えられる。

#### 第53号土壙（第15図5）

C区中央、やや西寄りで検出された。北西側には第52号土壙、東側には第54号土壙が位置する。

平面形は、南西側がトレンチャーによって破壊されているため不明であるが、大略南北に長い楕円形ブ

ランと考えられる。規模は長径推定1.5m、短径1.35m、深さは15cmを測る。壙底は概ね平坦である。

覆土は第52号土壙と同様、やや軟弱な明茶褐色土の単純層で、ロームブロックを多量に含有する。焼土粒、炭化物の混入も少量みられる。

出土遺物は須恵器、土師器の小破片のみで、図化し得るものはなかった。本遺構は覆土の状況、平面形から勘案して、近世以降のものと考えられる。

#### 第54号土壙（第15図6）

C区中央やや西寄り、第53号土壙の東側で検出された。

平面形は、南北に長い不整橢円形プランを呈し、比較的小形である。規模は長径1.0m、短径0.6mで、深さは12cmを測る。壙底は大略フラットである。西壁に偏して、深さ10cmの小ピットが穿たれている。

覆土は同区検出の他の土壙と同様、軟弱な明茶褐色土の単純層で、ロームブロックを多量に含有する。焼土粒、炭化物の混入も少量認められる。

出土遺物は須恵器、土師器の小破片のみで、図化し得るものはなかった。本遺構の時期は覆土の状況から、第52・53号土壙と概ね同時期と考えられる。

#### 溝

##### 第5号溝（第8図）

E区で検出された。南北方向に延びるものと考えられるが、狭い範囲で確認された上、北側に攢乱を受けているため詳細は不明である。D区で検出されなかったことから、北側は県道狭山鯨井線の下を通るものと考えられる。

確認面での幅1.2m、溝底幅0.5m、深さ54cmを測る。壁は急角度で立ち上がり、断面形は薬研堀様を呈している。溝底は平坦で、全体的にしっかりした作りとなっている。

覆土は上位から中位にかけて、黒色の強い色調を呈し、下位はロームブロックの混入が顕著であった。全体的に堅く締まっていた。

本溝からの出土遺物は、須恵器、土師器の小破片のみで、時期決定に供することは出来ない。ただし、覆土の状況、断面形から奈良・平安時代から中世にかけての遺構と考えることが出来よう。

### 3 出土遺物

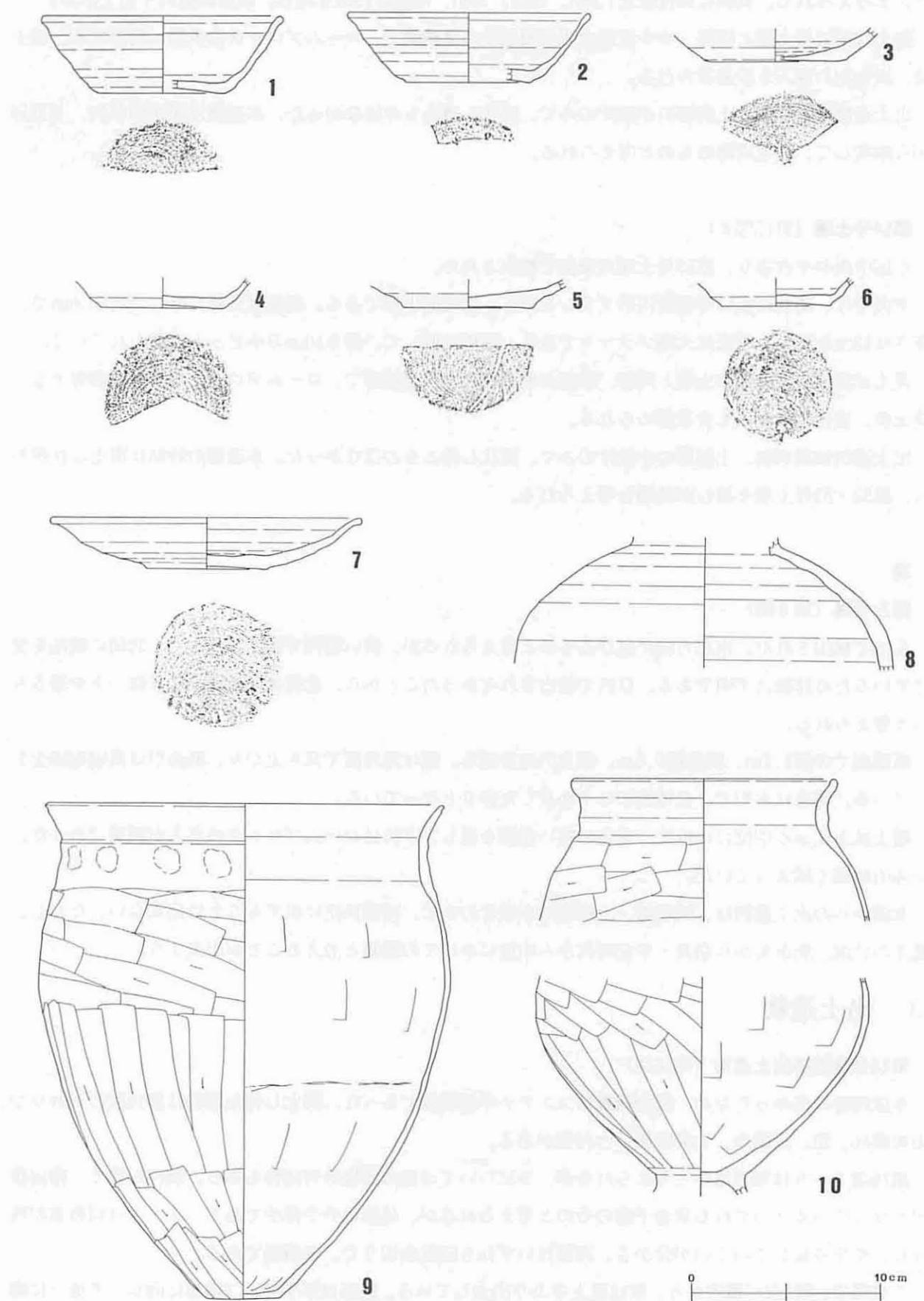
#### 第14号住居跡出土遺物（第16図）

本住居跡は浅かったため、遺物総量はコンテナ半箱程度であった。図化し得た遺物は第16図のとおりで、須恵器壺、皿、長頸壺、土師器甕、台付甕がある。

第16図1～6は須恵器壺と考えられるが、3については他の器種の可能性もある。残存が悪く、推定復元となっている。いずれも東金子産のものと考えられるが、体部はやや薄手である。1・2は口唇部が残存し、やや外反しているのが分かる。底部はいずれも回転糸切りで、未調整である。

7は皿で、約1/2が竈内から、他は覆土中より出土している。底部は厚手で、口縁部に向かって徐々に薄くなっている。底部は回転糸切り後、未調整。東金子産と思われる。

8は長頸壺で肩部の一部が残存する。外面には降灰が顕著で、黄緑色を呈する。東金子産。



第16図 第14号住居跡出土遺物

## 第14号住居跡出土遺物観察表

(単位: cm)

No	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	特徴	残存率
1	須恵器坏	(12.9)	(6.8)	4.1	白色粒・赤色粒・石英	不良	橙色	口唇部、若干外反。口縁部の色調は淡い。重ね焼の痕跡か?	35%
2	〃 坏	(13.0)	(6.8)	3.7	白色粒・石英・礫	普通	暗灰褐色	全体に薄手であるが、口唇部は肥厚する。	20%
3	〃 坏?	—	(7.5)	(1.7)	白色粒・砂粒	不良	淡褐色	坏ではない可能性もある。底部中央は薄くなっている。	25%
4	〃 坏	—	6.6	(1.6)	白色粒・赤色粒・石英	普通	淡灰褐色	体部は底部から緩やかに立ち上がる。薄手。	65%
5	〃 坏?	—	7.1	(1.5)	白色粒・礫	やや不良	淡黄灰色	皿の可能性もある。	45%
6	〃 坏	—	5.8	(1.5)	白色粒・砂粒・礫	良好	灰色	底部のみ残存。径が小さい。	70%
7	〃 皿	(16.6)	6.5	2.7	白色粒・赤色粒	不良	明黄褐色	約半分は竈内から出土。口唇部は外傾し相対的に水平になる。	65%
8	〃 長頸壺	—	—	(6.9)	白色粒・砂粒	良好	灰色	肩部のみ残存。降灰が顕著。	25%
9	土師器甕	21.2	4.0	26.3	白色粒・赤色粒・石英	良好	褐色	竈内より出土。下半部内面は火熱を受けて、荒れている。	75%
10	〃 台付甕	(14.0)	—	—	白色粒・角閃石	良好	褐色	竈内より出土。上下は接合しなかった。	40%

9・10は土師器で、両者ともに竈内からまとまって出土した。9は甕である。口縁部は大略「コ」字状を呈し、指押えの痕跡を残す。胴部上半は横からやや斜位、下半部には縦方向のヘラ削りが施され、頸部直下から底部に至るまで器壁は極めて薄く仕上げられている。内面には一部に輪積痕を残す。また、内面下半部は火熱を受けて剝離しているため、竈使用時から中に落ちていた可能性もある。

10は台付甕である。口縁部から胴部上半部と下半部がそれぞれ接合したが、中位が極めて薄く接合箇所が見出せなかった。おそらく同一個体と思われる。口縁部は「コ」字状を呈する。上半部には横位あるいは斜位の、下半部には縦位、斜位のヘラ削りが施されている。台部は欠損する。

## 第15号住居跡出土遺物（第17・18図）

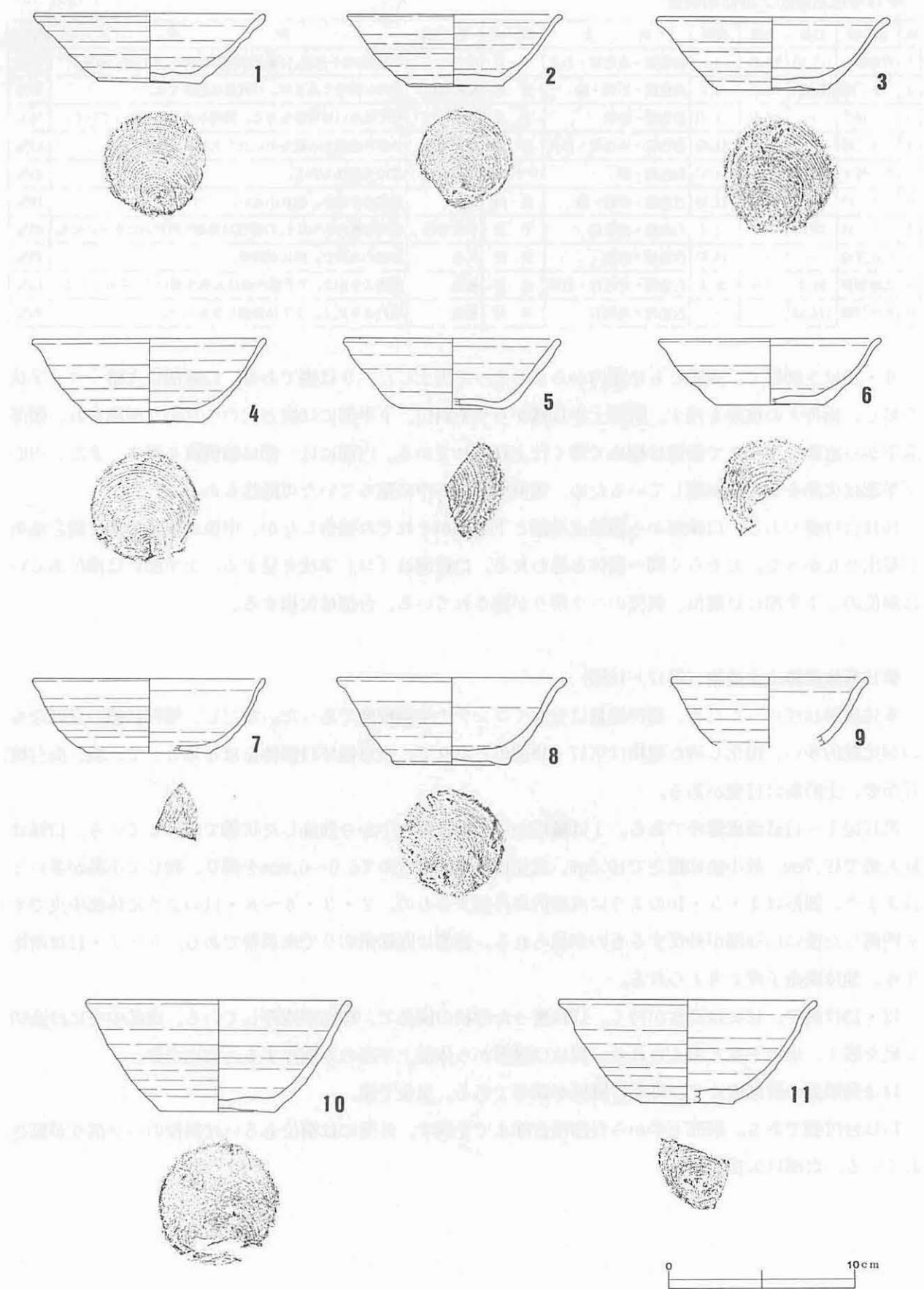
本住居跡は浅かったため、遺物総量は少なくコンテナ半箱程度であった。ただし、遺存状態の良好なものが比較的多い。図化し得た遺物は第17・18図のとおりで、須恵器坏11個体をはじめとして、椀、高台椀、長頸壺、土師器台付甕がある。

第17図1～11は須恵器坏である。1は竈内から、他は覆土中から散乱した状態で出土している。口径は最大値で12.7cm、最小値は推定で10.5cm、底径は推定値も含めて5.0～6.8cmを測り、総じて小品が多いと言えよう。器形は1・5・10のように直線的に外傾するもの、2・3・6～8・11のように体部中央でやや内湾した後に口唇部が外反するものが見られる。底部は回転糸切りで未調整である。5～7・11は南比企産、他は東金子産と考えられる。

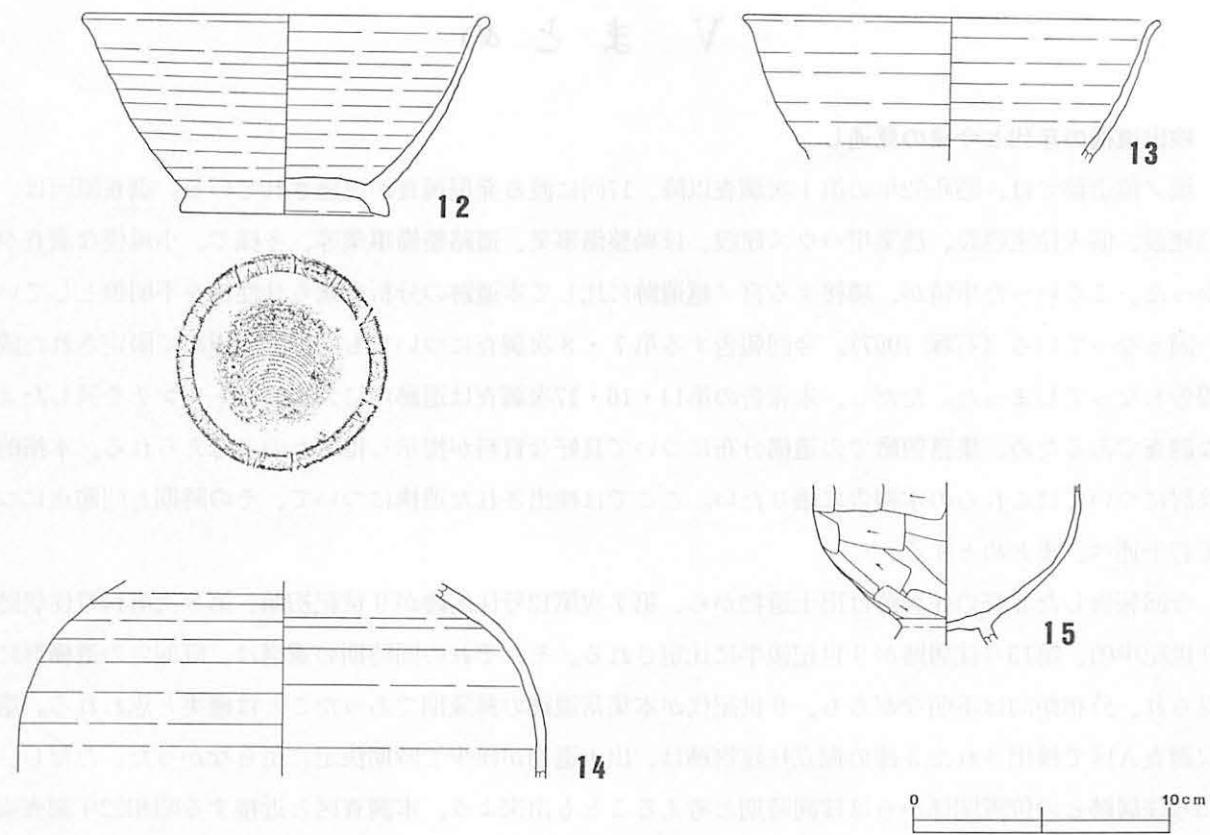
12・13は椀で、12には高台が付く。12は整った形状の優品で、80%が残存している。底部中央には糸切り痕を残す。東金子産と考えられる。13は口縁部から体部上半部のみ残存する。南比企産。

14は長頸壺の肩部破片で、外面に降灰が顕著である。東金子産。

15は台付甕である。胴部下半から台部接合部までを残す。外面には横位あるいは斜位のヘラ削りが施されている。台部は欠損する。



第17図 第15号住居跡出土遺物(1)



第18図 第15号住居跡出土遺物(2)

第15号住居跡出土遺物観察表

(単位: cm)

No	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	特徴	残存率
1	須恵器壺	12.4	5.6	3.8	白色粒・石英・砂粒	良好	灰色	器壁厚手。体部は直線的に立ち上がり、口唇部は肥厚する。	100%
2	〃 壺	11.7	5.3	3.9	白色粒・石英・砂粒	良好	灰色	1とほぼ同じ器形を呈するが、若干薄手。	80%
3	〃 壺	12.5	6.0	4.0	白色粒・礫	やや不良	灰褐色	口唇部は肥厚し、わずかに外反する。	50%
4	〃 壺	12.7	5.8	4.4	白色粒	不良	淡褐色	底部は厚手だが、体部は薄い。やや丸みをおびる器形。	80%
5	〃 壺 (11.8)	5.8	3.7		白色針状物質・石英	普通	淡灰色	体部上半がやや厚いが、全体的に薄手。直線的に開く。	30%
6	〃 壺 (11.9)	(5.8)	3.5		白色針状物質・石英	普通	茶褐色	直線的に開き、口唇部はわずかに外反する。	30%
7	〃 壺 (12.5)	6.8	4.0		白色針状物質・赤色粒	不良	褐色	体部下半に丸みをおびる器形。	20%
8	〃 壺	12.5	6.4	4.7	白色粒・砂粒	不良	淡黄灰色	全体的厚手。口唇部、わずかに外反する。	65%
9	〃 壺 (10.5)	—	(3.9)		白色粒・石英・砂粒	やや不良	灰色・褐色	他のものに比して小形。厚手。	30%
10	〃 壺	14.3	6.4	6.0	白色粒・砂粒	普通	淡灰色	器高高く、椀に近い器形。体部は直線的に開く。	55%
11	〃 壺 (13.8)	(5.0)	5.6		白色針状物質・白色粒	良好	灰色	10に類似する器形だが、口唇部は外反する。薄手。	35%
12	〃 高台椀	15.9	8.2	7.8	白色粒・砂粒	不良	橙色・褐色	高台付の椀。背の高い器形が目を引く。口唇部は外反する。	80%
13	〃 椒 (16.3)	—	(5.6)		白色針状物質・白色粒	普通	淡黄灰色	器壁薄手。口唇部、わずかに外反。	35%
14	〃 長頸壺	—	—	(7.6)	白色粒・石英	良好	灰色	肩部のみ残存。外面に降灰。	10%
15	土師器台付壺	—	—	(6.4)	白色粒・角閃石・石英	良好	暗褐色	残存部は上端は、極めて薄く仕上げられている。台部欠損。	35%

## V まとめ

### 検出遺構の年代と今後の見通し

城ノ越遺跡では、昭和52年の第1次調査以降、17回に渡る発掘調査が実施されている。調査原因は、道路建設、個人住宅建設、農業用ハウス建設、ほ場整備事業、道路整備事業等、多様で、小規模な調査が多くかった。こういった事情が、隣接する宮ノ越遺跡に比して本遺跡の分析を遅らせ性格を不明瞭としている一因となっている（石塚 1997）。今回報告する第7・8次調査についても同様で、極めて限定された成果報告となってしまった。ただし、未報告の第14・16・17次調査は遺跡内に大規模なトレンチを通したような調査であるため、集落俯瞰での遺構分布について良好な資料が提示し得るものと考えられる。本格的な検討についてはこれらの本報告に譲りたい。ここでは検出された遺構について、その時期と問題点について若干述べ、まとめとする。

今回報告した3軒の住居跡は出土遺物から、第7次第13号住居跡が9世紀初頭、第8次第14号住居跡が9世紀中頃、第15号住居跡が9世紀後半に比定される。それぞれの同時期の遺構は、既報告の遺構群にも見られ、分布傾向は不明ながらも、9世紀代が本集落遺跡の興隆期であったことは確実と思われる。第8次調査A区で検出された3棟の掘立柱建物跡は、出土遺物が僅少で時期決定に至らなかった。ただし、第15号住居跡との位置関係からほぼ同時期と考えることも出来よう。本調査区と近接する昭和52年調査実施の第1次調査区（増田他 1978）では、同種遺構が集中して検出されており、その分布傾向には興味深い。

出土遺物の多数を占める須恵器は、主要供給源である東金子窯跡群の製品が圧倒的であるが、第13号住居跡ではかなりの量比で南比企産のものが認められる。また、9世紀後半の第15号住居跡でも一定量を占める等、同時期の第20号住居跡と同じ傾向を示し（石塚 2000）、当該地域における一般的な様相を示していると考えられる（入間地区文化財担当者部会 1995）。

以上、成果について概略的に述べてきたが、断片的な記述しかし得ないのが現状である。前述のとおり比較的規模の大きい第14・16・17次調査の本報告において、本遺跡の実態解明と研究の深化に努めたい。

### 引用・参考文献

- 石塚和則 1997『狭山市埋蔵文化財調査報告書11 城ノ越遺跡—第9～10次調査—』狭山市文化財報告第20集 狹山市教育委員会  
2000『狭山市埋蔵文化財調査報告書12 城ノ越遺跡—第12・13次調査他—』狭山市文化財報告第21集 狹山市教育委員会  
入間川地区文化財担当者部会 1995『入間郡における須恵器産地推定について』  
久保田福造他1983『狭山市遺跡分布調査報告書 第2集』狭山市史編纂係  
栗岡 潤他 1995『西久保他』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第156集  
駒見和夫他 1982『宮の越遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第44集 埼玉県遺跡調査会  
城近憲市他 1972『宮地』狭山市教育委員会  
中村倉司 1988『小山ノ上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第70集  
仲山英樹他 1994『稻荷上遺跡』狭山市遺跡調査会報告第6集 狹山市遺跡調査会  
増田正博他 1978『城ノ越遺跡』城ノ越遺跡調査会



城ノ越遺跡第7次調査風景



第13号住居跡調査風景

図版一 2



第13号住居跡全景



第13号住居跡竪全景



城ノ越遺跡第8次調査B区全景



第14号住居跡全景

図版一 4



第14号住居跡竈内遺物出土状況



第48号土壙全景



A区掘立柱建物跡群全景



第15号住居跡全景

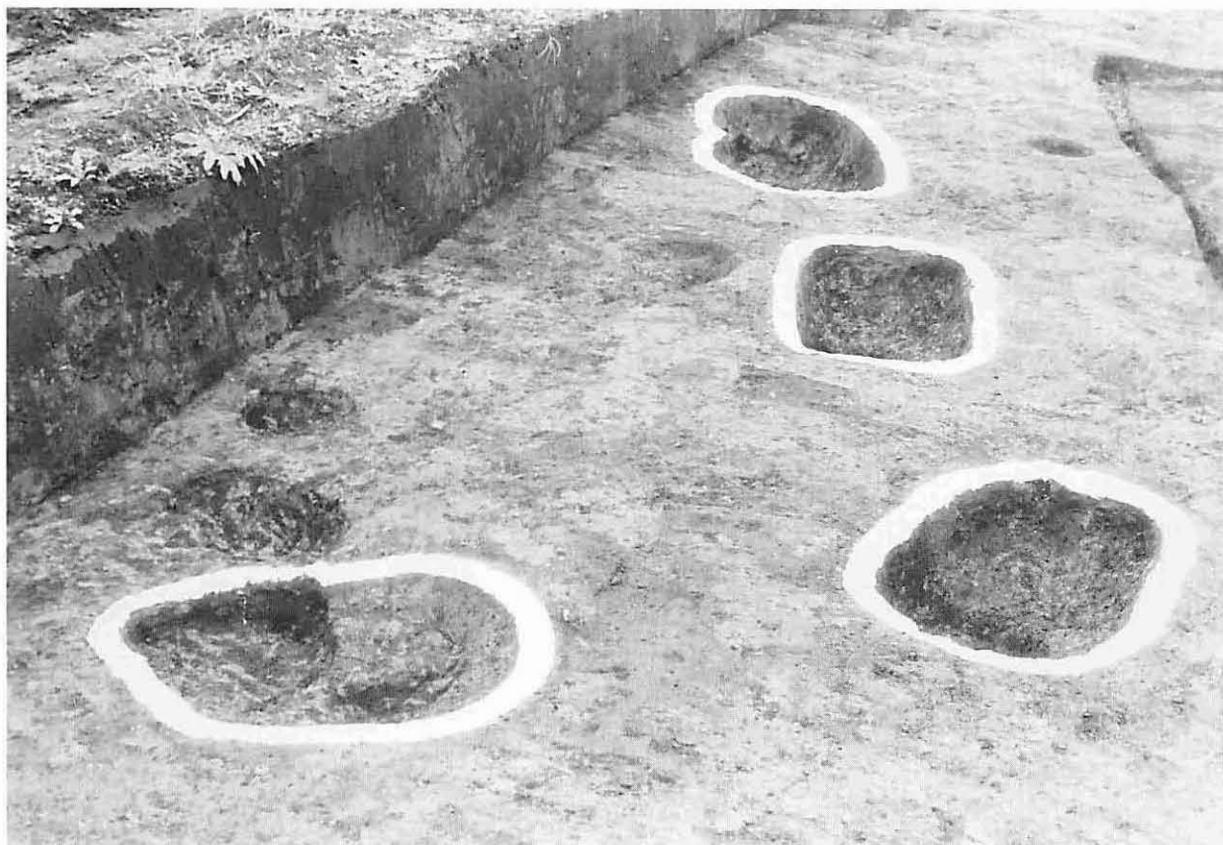
図版一 6



第50号土壤全景



第 6 号掘立柱建物跡全景



第 7 号掘立柱建物跡全景

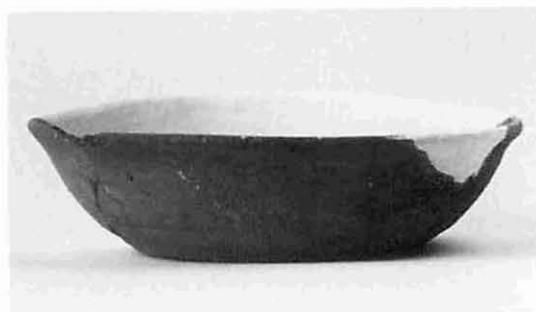


第 8 号掘立柱建物跡全景

図版一 8



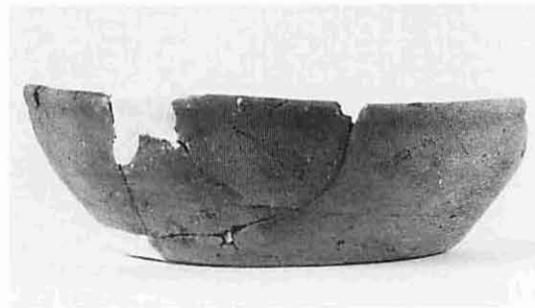
第5図2



第5図4



第5図5



第5図6

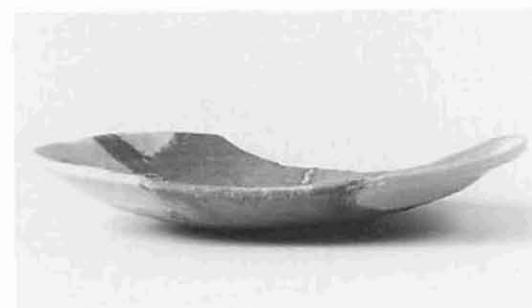


第5図9



第5図11

第13号住居跡出土遺物



第16図7



第16図9

第14号住居跡出土遺物



第17図 1



第17図 2



第17図 3



第17図 4



第17図 8



第17図 10



第18図 12



第18図 15

第15号住居跡出土遺物

## 報告書抄録

フリガナ	サヤマシマイゾウカンカザイチヨウサホウコクショ13 シロノコシイセキ ダイ7・8 ジチョウサ													
書名	狭山市埋蔵文化財調査報告書13 城ノ越遺跡－第7・8次調査－													
シリーズ名	狭山市文化財報告					シリーズ番号	第23集							
編者名	石塚和則			著者名	石塚和則									
編集機関	埼玉県狭山市教育委員会													
所在地	〒350-1380 埼玉県狭山市入間川1丁目23番5号 TEL 042(953) 1111													
発行年月日	西暦 2001年(平成13年) 3月31日													
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因						
		市町村	遺跡番号											
城ノ越遺跡 (県遺跡番号 22-013)	埼玉県狭山市 柏原字城ノ越 外	11215	013	139° 24' 49"	35° 52' 58"	021105 ～ 021114	258m <sup>2</sup>	個人住宅						
						030521 ～ 031015	840m <sup>2</sup>	ほ場整備						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項						
城ノ越遺跡 第7次調査	集落跡	縄文時代前期・中期	平安時代住居跡1軒			須恵器壺・椀・蓋・土師器甕・砥石								
城ノ越遺跡 第8次調査		奈良時代 平安時代	平安時代住居跡2軒、掘立柱建物跡3棟、土壙7基			須恵器壺・皿・椀・長頸壺・土師器甕・台付甕								

平成13年3月22日 印刷  
平成13年3月31日 発行  
狹山市文化財報告 第23集  
狹山市埋蔵文化財調査報告書13  
**城ノ越遺跡－第7・8次調査－**  
個人住宅・ほ場整備に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告  
発 行 狹山市教育委員会  
埼玉県狭山市入間川1-23-5  
電話 042(953)1111  
印 刷 望月印刷株式会社  
与野市円阿弥5-8-36  
電話 048(840)2111(代)

【正誤表】

城ノ越遺跡第7・8次調査  
(狭山市文化財報告 第23集)

ページ	行	誤	正
2ページ	組織表右2・8行目	山崎稔	山崎稔
	組織表右13行目	松嶋直人	松嶋直人
3ページ	17行目	開折	開析
5ページ	11 上広瀬上ノ原遺跡	22005	22007
	48 上中原遺跡	22025	22039
	49 中原遺跡	22025	22038
10ページ	6行目	椀	塊
12ページ	遺物観察表 №15・16	高台椀	高台塊
17ページ	最終行	椀	塊
27ページ	10行目	椀	塊
		高台椀	高台塊
29ページ	遺物観察表 №12・13	高台椀	高台塊
報告書抄録	城ノ越遺跡 北緯	139°24'49"	35°52'58"
	城ノ越遺跡 東経	35°52'58"	139°24'49"
	第7次 主な遺物	椀	塊
	第8次 主な遺物	椀	塊

